

三人の双生児

海野十三

青空文庫

あの一見奇妙に見える新聞広告を出したのは、なにを隠そう、この妾わたしなのである。

「尋タズネ人……サワ蟹ガニノ棲スメル川沿イニ庭アリテ紫ノ立タチアオイ葵アオイ咲ク。其ノ寮ソリヨウノ太コウシキ格子コウシヲ距ヘダテテ訪マシネ来ル手ハ、黄キハチ八丈チジヨウノ着物ニ鹿カノ子コシボ絞リノ広帯ヲ締メ、才カッパ河童カッパニ三ツノ紅アカキ『リボン』ヲ附ク、今ヨリ約十八年ノ昔ナリ。名乗り出デヨ吾ガ双生児ノ同胞ハラカラ。(姓名在社
×××××)

これをお読みになればお分りのとおり、妾はいま血肉をわけたはらからを探しているのである。今より十八年の昔というから、それは妾の五六歳ごろのことである。といえは妾の本当の年齢が知れてしまつて恥かしいことではあるが、まあ算術などしないで置きたい。
ただきたい。

妾の尋ねるはらからについては、それ以前の記憶もなく、またその以後の記憶もない。まるで盲人が、永い人生を通じて只一回、それもほんの一瞬間だけ目があき、そのとき観

たという光景がまざまざと脳裏のうりに灼きつやいたとでも譬たとえたいのがこの場合、妾のはらからに対する記憶である。思うに、それより前は、はらからと一緒にいたこともあるのであるが、当時妾は幼くて記憶を残すほどの力が発達していなかったのだろうし、それ以後は、妾とはらからとが何かの理由で別々のところに引き離されちまって記憶が絶えてしまったのであろう。とにかく川沿いの寮の光景は恰あたも一枚の彩色写真を見るようにハッキリと妾の記憶に存している。

なぜ妾がはらからを探すのかという詳しいことについては、おいおいとお話ししなければならぬ機会が来ようと思うから、今はまあ云うことを控えて置こうと思う。

——とにかく当時は五歳か六歳だった。黄八丈の着物に鹿の子の帯を締め、そしてお河童頭には紅いリボンを三つも結んでいるというのがそのころの妾自身の身形みなりだった。妾の尋ねるはらからというのは、その頃寮の中に設しつらえられた座敷牢のような太い格子の内側で、毎日毎日温和おしなしく寝ていた幼童ようどう——といっても生きていれば今では妾と同じように成人している筈だ——のことだった。

「なぜ、あの幼童は、暗い座敷牢へ入れられていたのだろう？」

今もそれをまことに訝いぶかしく思っている。どうしたわけで、あの年端としはもゆかぬはらからを

いつも暗い座敷牢のなかに入れ置いたのであろう。成人した人間であれば、気が変になつて乱暴するとかのような場合には、座敷牢に入れて置くのは仕方ないことだったけれど、あの場合とはかくも五つか六つかの幼童ではないか、乱暴をするといつてもせいぜい障しょう子のようじ棧さんを壊すぐらいのことしか出来る筈がない。それぐらいのこのためにわざわざ頑丈な座敷牢を用意してあつたことは、全く解きがたい謎である。

イヤよく考えてみると、あの幼童は別に気が変になつていたようにも思われぬ。そのころ妾は四度か五度か、或いはもつとたびたびだったかも知れないが、その幼童の座敷牢へ遊びにいった憶えがあるのであるが、決して乱暴を働いてるところを見たことがない。乱暴をするどころかその幼童はいつも大人しく寢床の中にじつと寝ていたのであつた。ついで妾は一度も起きあがつてるところを見たことがない。恐らく幼童は病身でもあつたのらうと思う。一体病身の幼童を座敷牢へ監禁して置くような惨さん酷こくきわまる親があるだらうかしら。考えれば考えるほど不思議なことではないか。

親といつたので、また一つ思いだしたけれど、妾がそのはらからの幼童のところへ遊びにいったときは、いつも必ず座敷牢の中に、妾の母がつきそつていた。母はやさしく、寝ている子供のために機嫌をとつていたようである。広告文にもちよつと書いておいたこと

だけれど、妾はそのころ髪をお河童にして、そこに紅いリボンを二つならず三つまでもカンカンに結びつけて悦よろこんでいた。なぜそれをハッキリ憶えているかというと、座敷牢のなかの妾のはらからは、そのカンカンに結びつけた紅いリボンがたいへん気に入ったとみえて、或る日妾がツカツカと寮に入つていったとき丁度なにかのことで無理を云つて附添いの母を困らしていたかの幼童は、涙のいっぱい溜つた眼で妾のカンカンを見ると、突然ピタリと機嫌を直してしまつたのだつた。

妾はその後もたびたび母に特別賞与の意味でお菓子を貰つた上、その座敷牢へ連れてゆかれたように思うが、いつもそのカンカンに紅い三つのリボンを結んでゆくのがお決りだつた。それにつけて、また不思議なことをもう一つ思い出すが、妾はそのとき得意になつて暗い座敷牢の格子に駈けより、

「いいカンカンでしょ、ばア……」

と顔と髪とをさし入れたのであつたが、寝ているはらからはそのたびに味噌つ歯だらけの口を開けてキヤツキヤツと嬉しそうに笑うのであつた。それはいいとして暫くするとそこで母はきつと妾によびかけて、ちよつと庭の方へ行つて、立葵の花を一枝折つてきてくれと云いつけるのであつた。それはいかにも唐とうとつ突な云いつけであつた。そんなときははら

からの顔はいかにも不満そうにキュウと唇を曲げて母の方を睨むにらようにするのであるが、母はそれを優しく慰め、それから妾の方を向いて声をはげまし、早く庭へ下りて用事を果すように嚴げんぜん然と云いつけたのであった。

妾はしぶしぶ云いつけられたとおり庭に下り、梅雨つゆちかい空の下に咲き乱れる立葵の一と枝をとっては、大急ぎでまた元の座敷牢へとび上っていった。

「いいカンカンでしょ、ばア……」

妾は立葵を格子の中になげこむと、同じ言葉をくりかえしているのであった。それを云わないと、母は妾を叱り必ず同じことを云わせられたものだった。幼童のはらからは再び妾のカンカンを見て、いかにも面白そうにゲラゲラと笑うのであった。そういうときに妾は奇妙な思いをしたことがあった。それは大口を明いて笑う幼童の歯並はなみが、或るときは味噌歯みそはだらけで前が欠けていたと思うのに、或るときは大きい前歯が二本生え並んでいたことがあった。これは幼い妾にとっては奇妙なことというより外に仕様のないことだった。妾はそのほかに、舌切雀の遊戯を踊ったりして寝ているはらからを悦ばせることをやめたけれど、必ずその途中で母の命令が出て、妾は庭へ下りると立葵の花を折ってきたり、蜻蛉草かたばみを摘んできたり、或いはまた大笹の新芽から出てきた幅の広い葉で笹舟を作っても

つてきたりするのであった。しかしながら子供ごころにも気のついたことは、庭へ下りて持つてくるのが、立葵であつても蜻蛉草であつても、それからまた笹舟であつても、どれであらうと大した違いがないのだつた。つまり妾のはらからにしても、またそれを云いつけた妾の母にしてもが、折角せつかく持つてきてやったものを殆んど見向きもしないで、ただ妾が、

「いいカンカンでしょ、ばア……」

と同じことをやるのに対して、たいへん悦び合うのだつた。だから妾はたびたび庭に下りさせられるのがすこし不満になつた。あまり悦ばれもしないのに、そういちいち力を出して花や草を折つてくるのが莫迦ばからしくなつた。それで一度に草花を沢山とつて懷中にねじこんで置き、母が庭へ下りて取つてこいと云いつけると、待つていましたとばかり、懷中からヒヨイと草花を取出して格子の中に投げ入れたのだつた。すると母は顔を赤くして、そんなずるいことをしてはいけない、すぐ庭に下りて新しいのを取つてくるようにと恐い顔をして云いつけるのであつた。妾はまたしても無駄骨でしかないことを庭に降りて繰りかえさねばならなかつた。その代り、母たちは妾の手折つてくる花や草が、たとえ破けていようが、汚れていようが、決して叱りはしなかつた。とにかく妾は必ず庭に一度降りて

きて、それからまた座敷に上ってきて、もう一度はじめから同じことをして、かの不幸なはらからを慰めることが必要であつたのだ。だがなぜにそんな煩わしいことを繰返す必要があつたのか、どうも妾の腑に落ちかねる。

この紅いリボンのカンカンはよほど妾のはらからの気に入ったものらしく、或る日妾が何の気もつかずいつものような紅いカンカンを結んで座敷牢に近づくと、座敷牢に寝ていた幼童はさも待ちかねたという風に、いつになく頭を振ってはまだ一度も見たことのないほど悦び騒いだ。妾は何ごとが起つたのだらうと訝しく思っていると、傍に附添っていた母が、

「ホラたま珠ちゃん（妾の名、たまえ珠枝というのが本当だけれど）——このカンカンをみておやりよ……」

と妾に云うので、それで始めて気がついてよくよく幼童の髪を見ると、向うでも髪に、妾と同じような紅いリボンを、数も同じく三つつけていたのであつた。

「カンカン。……」

と廻らない舌で叫び、あとはキャーツというような奇異な声をあげて、彼女——カンカンを結ゆつて喜ぶのだから、まさか「彼」ではあるまい、「彼女」にちがいはあるまい——妾

と同じカンカンをつけているというので、たいへんな悦びようであった。母はいつも彼女の背後に坐り、その頭の後方にある真黒な切布を覆った枕とも蒲団ともつかない塊の上に手をかけて、妻たちを見守っているものであったが、このカンカン競べのあつたときは、どうしたものかその黒い切布をかぶつたものがまるで自ら動きでもしたように捲かれてきた。そのとき妾はその黒布の下に、また別な紅いリボンがヒラヒラしているのを逸いちはや早く見てとつたものだから、たちまち大變氣色を悪くしてしまった。

「ずるいわずるいわ、あんたはあたいよりも沢山リボンを持っていて、隠したりなんかしているんですもの……」

と妾は格子につかまって駄々をこねだした。母はその内側でなにかひそひそ優しく叱りつけている様子であつたが、それは妾を叱りつけているわけではなかつた。と云つてヘラヘラ笑いつづけている機嫌のよい幼童を叱っているのだとも、すこし違つているように思えた。母は暫くしてから格子の外の妾の方を向き、

「珠ちゃん、リボンの数は皆同じよ。ホラよくごらんさい……」

といった。そういわれてからよく見ると、妾のはらからの頭にはチャンとリボンが三つついてた。さつき四つか五つぐらに見えたのは思いちがひだつたんだわと思つたこと

であつた。もちろんその日も、妾は次の順序として、庭に追いやられた。それから再び座敷へ上つてきてから、

「あんたも今日はいいカンカンしているわねエ、皆同じだわネ」

と同じ祝詞しゆくしを呈して、再びはらからの大騒ぎをして悦ぶ様さまを見たのであつた。

格子のなかの妾のはらからについては、妾はそれ以外に多くを憶えていない。第一どうしても思いだせないのは、彼女の名前だつた。母は格子の中に寝ている子供を指して、これはお前のはらからで、同じ年である。お前の方がお姉さまだから、温和しく可愛いがつてあげるのですよといったのは憶えているのだが、どうしてもそのはらからの名前が思い出せない。ひよつとすると、母はそのはらからの名前を妾に云わなかつたのかも知れない。妾がはらからについて記憶していることは大体右のような事だけである。その後のことについては全く知らない。その後のことは、座敷牢のはらからのことだけではなく、妾の母についても知るところがない。なぜなら妾はそれから間もなく、母と不幸なはらからとに別れてしまったからである。それは突然の別れであつた。それについては、いずれ後に述べることになるが、とにかく思いがけない事件が、妾から母と妹——カンカンを結んで喜んでいたはらからのことを、妹と呼んでいいだろう——とを奪ってしまったのだ。

その後ある機会に、妻の母は死んでしまったことを知った。そして残るのは妻の妹（？）の消息だけなのであるが、いま妻の企てている探索がもし成功しないとすれば、あの川添いの家でカンカンを見せ合ったときが、実に母と妹とに対する最後の別れとなるのである。だが実を云えば、あの新聞広告は、妻のあのはらからの生死を確かめることも目的ではあるけれども、妾としてはもつともつと重大な意味があることを一言申しあげて置かねばならない。それはいかなるわけかと云えば、最近妾は偶然の機会から船乗りだった亡父の残していった日記帳を発見し、その中に、実に何といったらいいか自分の一身上について、大きな謎に包まれた記載文を発見したのである。その文意は、気にしないではあまりに奇々怪々に過ぎるのである。

——いまから二十三年前の二月十九日の父の日記帳には、次のようなことが書きつけてあった。

「二月十九日。——呪われてあれ、今日授かりたる三人の双生児！」

三人の双生児？

二人の双生児なら、これはよく分るが、三人の双生児とはどうしたことであろうか。三とあるのは二の誤記ではあるまいかと思つたが、よく考えてみると、双生児が二人なら、別に改まつて「二人の双生児」と断る必要はない筈である。三人だからこそ不思議なので、三人のと断つたものだと考えられる。二月十九日といえば、たしかに妾の誕生日なのである。これは妾の手文庫の中にあつた妾の緒にチャント書いてあつたから間違ひはないと思う。すると二月十九日には妾の外にもう二人のはらからが誕生したことになる。

もつとも父は「授かる」と記し、「家内が産んだ」とは書いてないので、疑えば疑えないこともないが、まず授かるといえば、父の子供として認める意志があつたように取れるので、出産のあつたものと見るのが無難だと思う。

すると妾の母は、三人の双生児を生んだのであろうか。そしてそのうちの一人が、この妾なのである。残りの二人は何処にいたのであろうか。どうして三人で双生児なのであろうか。そういうことはあり得ることではない。二人ならば双生児だし、三人ならばどうし

ても三つ子といわなければならぬ。いくら三つ子が生れたからといって、父が三つ子を双生児と書き誤る筈はないと思う。そうになると、三人の双生児という有り得べからざる名称のうちに、何か異状の謎が語られていることになる。

妾はいろいろと縁みを探してみた。だがそれがどうしてもハッキリ分らない。実は父が死んだときは、妾が十歳のときのことであるが、そのとき父についていた身内というのは妾一人だった。しかも生れ故郷を離れて、妾たちは放浪していたその旅先だった。

前に妾が述べたように、妹とカンカン競べをやったのが最後となって、母と妹とに別れた話をしたが、両人が妾の前から見えなくなつて間もなく、父は親類の赤沢さんの伯父さんと大喧嘩をやつたことを憶えている。恐らくこの喧嘩は母と妹とが見えなくなつた事件と関係のあることだろうとは思ふが、詳しいことは知らない。

と、間もなく妾は父に連れられて故郷を立ち、貨物船に妾ともども乗り組んだ。それから妾は父の死ぬまで四五年の海上生活を送ることになり、船の上で物心がついてきたのであつた。

「お母アさま、どうしたの？」

と、妾はよくこの質問を父にしたことだった。それを云うと、父は急に機嫌を悪くして

嘔んで吐きだすように云った。

「おツ母アはどこかへ逃げちまったよ。お前が可愛くはないのだろうテ」

「あの立葵の咲いていた分れ家のネ」

「ウン」

「あの中に、あたしの同胞はらからがいたわネ。あの子を連れて逃げちやったのでしょ
すると父は首を大きく振って、

「イヤイヤそうじゃないよ。あの子は赤沢の伯父さんが、どっかへ連れて行ってしまったんだよ。おツ母アは、あの子も可愛くないのだろう」

「じゃお母ア様は、誰が可愛いの」

「そりや分らん……赤沢にでも聞いてみるのじゃナ」

父は苦い顔をして応えた。

「ねえ、お父さま。もとのお家へ帰りましょうよ、ねえ」

「もとのお家？ なぜそんなことを云うのだ」

と、父は俄かに声を荒らげているのであった。

「もとの土地へ帰っても、もうお家などは無いのじゃ。あんな面白くもないところへ帰っ

てどうするんか。この船の上がいいじゃないか。じつとして、どんな賑かな港へでもゆける」

父は故郷を呪ってやまなかつた。

「お父さま。あたしたちの故郷は、何というところなの」

「故郷のところかい。おお、お前は小さかったから、よく知らんのじやなア。イヤ知らなけりや知らんでいる方がお前のためじや。そんなものは聞かんがいい、聞かんがいい」

と云つて、父は妾が何と云つて頼んでも、故郷の地名を教えなかつた。だから妾は、幼い日の故郷の印象を脳裏のうりにかすかに刻んでいるだけで、あの夢幻的な舞台がこの日本国中のどこにあるのやら知らないのであつた。

いまにして思えば、あのとき何とかして故郷の方角でも父から訊ききだして置くのであつたと、残念でたまらない。なぜなら、その後父は不ふ心と変りがして船を下り、妾を連れて諸所ぜいたく贅たく沢な流浪を始めたが、妾が十歳の秋に、この東京に滞在していたとき、とうとう卒中のために瞬間にコロリと死んでしまった。そしてとうとう妾は永久に故郷の所在を父の口から聞く術すべを失つたのであつた。それから後ずつとこの方、故郷はお伽とぎ噺ばなしの画の一頁のように、現実の感じから遠く距へだたつてしまったような気がする。

幸いに父が持つて歩いてきたトランクの中に、相当多額の遺産を残して置いてくれた。それは主として宝石と黄金製品とであったが、父が海外で求めて溜めていたものであろう。その遺産故に妾を世話する人もあつて、こうして東京の地に大きくなる事が出来たのであつた。いま妾は至極気楽に見える生活をしている。数年前には、話が出来て贅をとつたけれど、彼は二年ばかりして胸の病気で針金のように痩せて死んでしまった。それからこつち妾は気楽に見える若い有閑未亡人ゆうかんマダムの生活をつづけている。再縁の話も実は蒼蠅うるせいほどあるのではあるが、妾は一も二もなくこれをお断りしている。結婚生活なんて、そんなに楽しいものではないからである。それにこの節は、結婚などということよりも、もつとつと気にかかることがあつて、その方へすつかり精力を引よせられているので、男のこともなんか考えている余裕がないのである。気にかかることというのは、もちろんこれまでにお話したとおり、生死不明の妾のはらからを探しあてることが出来るかどうかということである。そして、妾の名誉のためにも誇りのためにも三人の双生児の謎を解くことができるかどうかということである。

あの新聞広告を出したその翌日から、妾の住んでいる渋谷羽沢しゅがやばしざわの邸は俄かに賑かになつた。それは新聞広告をみてから各種の訪問客が殖えたということである。それはきつと妾

のことだろうと行って、はらからを名乗ってくる人が毎日十二三人ある。併し随分平気で出鱈目でたらめをやる人があると見えて、やってくる人の殆んどは三十歳を越している。妾が本年二十三歳なのを考えれば、もつと早く気がつく筈だと思ふが、妾の前で滔々とうとうとして原籍や姉妹のことを喋つてしまつて、大分経つてから気がついて急に逃げだすというのが多い。ただその中に三人だけ、妾の関心を持てる人が混つていたのである。

まず第一にお話しなければならぬのは、速水春子はやみずはるこという女流探偵のことである。彼女はあの新聞広告を見ると、早速さつそく妾のところへやつて来た。妾はお手伝いさんのキヨに、一応その女流探偵の身形その他を訊きただした上で、客間に招じて逢つてみた。

春子女史は、薄もので拵こしらえた真黒の被布に、下にはやはり黒っぽい単衣ひとえの縞もの銘仙を着た小柄の人物で、すこし青白い面長の顔には、黒い縁の大きな眼鏡をかけて、ちよつとみたところ年齢のころは二十五六の、まずポインター種の獵犬が化けたような上品な婦人だった。妾は女探偵などというと、もつと身体の大きな体操の先生のような婦人を想像していたのであるが、速水春子女史はそれとは違つた智恵そのもののような女性だった。しかし彼女の眼だけはギロリと大きくて、妾にとつてはたいへん気味がわるかつた。

「新聞で拝見しましたんでございますけれど……」

と女史はさも慣れ切つていふ風の話の口を切つた。

「たいへん六ヶ敷むっしそうなお探しものでいらつしやいますのネ。あたくしにお委せ下されば、イエもう永年の経験でこつは弁わきまえて居りますから、すぐに貴女さまのご姉妹を探しましてごらんに入れますわ。……ええと、それでまずその問題のお父上の日記帳というのを拜見しようございますが……」

妾は手文庫のなから、父の日記帳をとりだした。それはポケット型というのであろう、たいへん小さな冊子で黒革の表紙もひどく端がすりきれて、その色も潮風にあたつて黄いろく変色していた。それを開くと、中は罫けいなしの日附は自由に書きこめるといふ式の自由日記で、尖さきの丸い鉛筆を管なめ管なめ書きこんだらしい金釘流の文字がギツシリと各頁に詰まっていた。女流探偵はその中の或る日記を声を出してよみだした。

「ほう、こんなことが出ていますわ。——二月一日、『タラップ』ノ手摺ヲ修繕スル。相棒ガ不慣ハカドデナカナカ抄ハカドラヌ。去年ノ今頃モ修繕シタコトガアツタツケガ、ソノトキハ赤沢常造ノ奴ガイタカラ、半日デ片付イタモノダ。彼奴ガ下船シテ故郷ニ引込ハソノ直後ダツタ。モウ一年ニナルノニ、彼奴ハ故郷ニジツトシテイテ、ドコニモ働キニ行コウトシナイ。ワシハオ勝ノコトガ心配デナラン。ト云ツテモ、オ勝ハモウスグオ産ヲスル。オ

産ヲスルマデハ、イクラ物好きナ彼奴トテモ手ヲ出ス様ナコトガアルマイ。トハ云ウモノ
ノ、女ヲ盗ムニハ妊婦ニ限ルトユウ話モアルカラ、安心ナラン——ほほう、亡くなつた貴
女さまのお父さまは、この赤沢常造という男を大分氣にしていらつしやるようですが、こ
れはどんな関係の方でございましょうか」

「その赤沢というのは、伯父さんだと憶えています。一度父と大喧嘩をしたので、あたし
は知っているのです」

「どんなことから大喧嘩なすつたのでございましょう」

「さあそれは存じません」

「それは重大なことですね。……それから奥様のお生れ遊ばしたのは何日でございませ
うか」

「その日記の最後の日附がそうなのです」

「ああそうでございますか。そうそう、この同じ二月十九日に、貴女さまはお生れ遊ばし
たのでございますね」

そういつて春子女史は日記の頁の最後のところまでめぐり、

「ああ、ありました。二月十九日、オオ呪ワレテアレ、今日授カツタ三人ノ双生児！こ

れでございますネ。三人の双生児！」

と、女流探偵は深刻な表情をして、三人の双生児！と口の中でくりかえした。

「いかがでございましょう。お心あたりがありました」

と訊ねると、女史は、

「これは現地について調べるのが一番早や道でございますわ。探偵が机の上で結論を手品のように取出してみせるのはあれは探偵小説の作りごとでございますわ。本当の探偵は二にも実践、二にも実践——これが大事なので、そこにあたくしたちの腕の奮いどころがあるのですわ、奥さま」

「でもその現地というのが雲を掴むような話で第一何処だか見当がついていないのですよ」
「それは奥さま、調べるようにいたせば、分ることでございますわ」

と女史は怯む気色もせず云い放った。

「広告にお書きになりましたサワ蟹とか立葵とかは、日本全国どこにもございまして、これは手懸りになりません。でも奥さまは、もつと何か地方的な特色のあることを御存知の筈と存じますわ。小さいとき、よくお氣のつくものとしては物売りの声、お祭りなどの行事、その辺のごく狭い地区の名、幼な馴染の名などございますが、一つ思い出してい

ただきましようか」

そこで妾は変な諮問しもんを受けることとなった。

「物売の声で、なにか憶えていらつしやるものはございません？」

「さあ、——」

と妾はこの意外な問いにすくなからず驚いた。そして長い間考えていたが、やっと一つ思い出すことが出来た。

「そうです、魚売りのおぼさんの呼び声を思い出しましたわ。こうなんです——いななやかれい鱈わや竹輪ちくわはおいんなはらーん、という」

「おいんなはらーんでございますか。たいへん結構なお手懸りでございますわ。ではもう一つ、お祭の名称など、いかがでございます」

「さあ、——明神さまのお祭りだとか、それから太い竹を輪切りにしてくれるサギツチヨウなどというものがありました」

「ああ左義長さぎちやうのことですネ。それも結構です。それからこの辺の村の名とか町の名とか憶えていらつしやいません」

「近所の地名ですか何ですか。アタケといっていましたわ」

「ああアタケ、安宅と書くのでしよう。ああ、それですっかり分りました」と、春子女史はいった。

「すると奥さまのお郷里は四国です。阿波の国は徳島というところに、安宅という小さな村があります。そこならサワ蟹だつて、立葵だつて沢山あります。ではあたくし、これから鳥度行つて調べて参ります。四五日の御猶予を下さいませ」

女史の探偵眼はたいへん明快であつた。どうして、そんな明快な答が出たのか妾には合点がゆかなかつたけれど、彼女は別に高ぶる様子もなく、妾の故郷だという四国の安宅村へ、三人の双生児の実相を確めるために発足するといつて辞し去つた。妾は狐に鼻をつままれたように、女史を見送つたが、後になつて一切が判明するまではこの女流探偵の神通眼は単に出鱈目だと思つていたのであつた。

新聞広告を見て妾を尋ねてきた人の中で、第二にお話しておかなければならないのは、
安宅真一あたくしんいちという青年のことだった。その青年は、背が極く低くて子供ぽかった。身長五
尺四寸に肥満性という女の妾と較べると、まるで十年も違う弟のように見えた。そして瘦
せている方ではなかったが、顔色は透きとおるように白く、捲かれたような小さい唇はほ
んのちよっぴり淡紅色に染まっているというだけであつて、見るからに心臓に故障のある
のが知られた。顔だちも妾とは違つてメロンのようにまん丸かつた。

その安宅という青年が邸に来たとき、妾は彼があまりに年端としはもゆかない様子なのを見て、
一体何の用で来たのか会つてみたくなつた。それで客間に招じて応接してみると、やはり
用というのは、自分こそは貴女の探している双生児の片割れであろうと思つてやつて来た
というのであつた。

「嘘を仰おっしゃ有い。あなたは一体いくつなの。妾よりも五つ六つ下じやないの」
と妾は少年——でもないが、その安宅真一を頭から擲からか揄かつた。

「そんなことはないでしょう。僕、これでも二十三か四なんです」

「あら、妾が二十三なのを知つて、わざとそんなことを仰有るのでしょう」

「いえいえ、そんなことはありません。本当に二十三か四なんです」

「二十三か四ですって、三か四かハッキリしないのは、一体どういうわけなの」
 安宅青年はそこで物悲しげに眉を顰めてから、

「実は僕は親なし子なんです。兄弟があるかどうかも分っていません。どうかして小さいときのことを知りたいと思つて気をつけていたところへ、あの新聞広告が眼についたのです。世の中には似たような人もあるものだなと思ひました。とにかく伺つてみればもしや自分の幼いときのことか分る手懸りがありはしないかと思つて、それでやつて来たというわけです。僕は小さいときのことをすこしも憶えていません。記憶に残つてゐる一番古いことは、たしか八九歳の頃です。そのころ僕は、お恥しいことですが、見世物に出ていました。鎮守さまのお祭のときなどには、古ふるのぼり幟ぼりをついだ天幕張りの小屋をかけ、貴重なる學術参考『世界に唯一人の海盤車娘の曲芸』というのを演じていました」

そういつて語る安宅の顔付には、その年頃の澆はつらつ刺つたる青年とは思はず、どこか海底の小暗いこくら軟泥なんでいに棲すんでゐる棘きよくひ皮動物の精が不思議な身みの上うえ咄うたを訴うへてゐるという風に思われた。真一は言葉が続けて、

「僕を持つていたのは蛭間興行部の銀平という親分でしたが、僕は祭礼に集つてくる人たちから大人五銭、小人二銭の木戸をとつた代償として、青いカーバイト灯の光の下に、海

底と見せた土間の上でのたうちまわり、自分でもゾツとするような『海盤車娘』の踊りや、見せたくない素肌を曝したり、ときにはお景物に濁酒くさい村の若者に身体を触らせたりしていました。もちろん見物の衆は、僕のことを女だと思っていたのです。本当は僕は立派に男なんです。けれど生れつき血の気のないむっちりとした肉体や、それから親分の云いつけでワザと女の子のように伸ばしていた房々した頭髮などが、僕を娘に見せていたのでしょうか」

「海盤車娘って、あなたの身体になにか異ったところでもあるんですか」

と妾はゾクゾクしながら尋ねたのだった。

「それは異状があれば有るといえるのでしよう。でも結局は興行師の無理なこじつけでした。それで見物の衆はインチキ見世物を見せられたことになると思うのですが、実は僕の背の左側に楕円形の大きな癍痕があるんです。そして僕がその癍痕を動かそうとすると、その癍痕は赤く膨れて背中よりも五六分隆起して上下左右思うままにピクピクと動くのです。ですからどうかすると、むかし僕の背中には一本の腕が生えていたのを、その附け根から切断したために、跡が癍痕になっっているようにも見えるのでした。見世物になるときは、そこにゴム製の長い触手をつけ、それを本当の腕であるかのように動かすのでした。

つまり僕は二本の脚と三本の腕とを持っているので、丁度ちようど五本の腕の海盤車の化け物だ
 というのです。いかがです。もしお望みでしたら、今此所でその気味の悪い癩痕をござら
 に入れてもようございます」

「まあ、ちよつと待つてちようだい——」

出されてはたいへんなので、思わず妾は悲鳴にちかい声をあげた。なんといういやらし
 い男があつたものであろう。新聞広告を出したために、たいへんな人間がとびこんできた
 ものであつた。肩口のところこゝで紅くなつてムクムク膨れ出してくる第三本目の腕の痕など、
 ちよつと一と目見たい好奇心もおこるけれど、やはり恐ろしかった。白面しろつづでもつて、そん
 ないやらしいものを見られるものじやありやしない。これは随分変態的な男であると呆れあき
 るより外ほかなかつた。でもどうしたというのであろう。呆れるという以上に、近頃刺戟に飢
 えているらしい我が身にとつて何かしら、気にかかることでもあつた。

「それであんたは妾の兄弟だと思つているの」

と、妾は話頭を転じたのだつた。

「さあ、それを確かめたくて伺つたのですけれど、とにかく僕は貴女がなにか関係のある
 人に思われてならないのです」

聞けば聞くほど、興味の深い海盤車娘ひとでむすめの物語ではあつたけれど、妾はそれ以上聞いているのに耐えられなかった。それでもういい加減に、この変な男に帰ってもらいたくなくなった。それで妾は最後にハッキリと云つてやつた。

「こうして話を伺っていると、あたしとあんたとは、たいへん身の上が似ているように思いますわよ。でも、あたしとしては、知りたいと思う一番大事なことが、いまのあんたの話では説明されてないように思うのよ。第一それはネ、あたしと双生児のその相手というのは、あんたみたいに男ではなくて、女だと信じているわ。つまりこうなのよ。あたしが小さいとき、その双生児の寝ている座敷牢のようなところへ行つたときに、その子は頭髪に赤いリボンをつけていたのをハッキリ憶えているのよ。赤いリボンをつけているんだから、きつとその子は女に違いないと思うわ」

「しかし僕は、長いこと女の子にされてしまつて海盤車娘というやつをやつていました。女といえど女じゃありませんか」

「さあ、それは違ふでしょう。あんたが女の子に化けたのは八九歳から後のことでしょう。興行師の手に渡つてから、都合のよい女の子にされちまつたんじやありませんか。あたしの憶えているのはずっと幼い五六歳のころのことです。その頃のあたしはちゃんと父母の

手で育てられていたので、男の子を特別に女の子にして育てるといふようなことはなかったと思うわ」

「そうでしょうかしら」

と真一は物悲しげに唇を曲げた。

「それにサ、世間をみても双生児には男同志とか女同志とかが多いじゃないこと。そしてさつきからあんたの顔を見ているのだけれど、あんとあたしとはまるで顔形も違っていれば、身体につきも全然違っているように思うわ。ね、そうでしょう。どこもここも違っているでしょう。強いて似ているところを探すと、身体が痩せていないで肉がボタボタしていることと、それから月の輪のような眉毛と腫れぼつたい眼瞼とまアそんなものじゃないこと」

「それだけ似ていれば……」

「それくらい相似なら、どんな他人同志だって似ているわよ。とにかくあんたは、あたしの探している双生児の一人じゃないと思うわ」

「そういわないで、僕を助けて下さい」

と真一は両手で顔を蔽い、ワツと泣きだした。

「ぼ、僕はいま病気なんです。それで働けないのです。僕はもう三日も、碌ろくに食事をしないでいます。ますます身体は悪くなってきました。お願いですから、助けて下さい」

こんなことになってしまつて、妾はたいへん当惑とうわくした。これはなんとかして、早く帰つてもらわないといけないと思つた。それには彼が居たたまれないように、もつと弱点をつくことにあると思つた。

「あたしは、本当のはらからを見つけたくてあの広告を出したのよ。あんたは知らないでしょうけれど、あたしは双生児でも、三人一組なのよ。つまり三人の双生児であると、死んだ父が日記に書き残してあるわ。この点からいってもあんたの持つてきた話の中には三人の双生児という重大な謎を解くに足るものがすこしも入っていないじゃありませんか。だからたいへんお気の毒だけれど、あたしはあんたを兄とも弟とも認めることができないのよ。ネ、わかるでしょう」

畳に身を伏せて、嗚咽おえつしていた真一は、このとき俄かに身体をブルブルと震わせ始めた。それは持病の発作が急に起つてきたものらしかった。彼は苦しげに胸元を掻きむしり、畳の上を転々として転がった。あまりに着物を引張るので、その垢じみた単衣はべりべり裂け始め、その下から爬虫類はちゅうるいのようにねつとりした光沢こうたくのある真白はだな膚むが剥きだしにな

つてきた。そして妾は、はからずもそこに遂に見るべからざるものを見てしまった。真一の背にある恐ろしき癩痕きざ！

「おおいやだ——」

彼の話まごに勝つて、それはなんとという気味の悪い癩痕きざだったろう。それは確かに生きている動物のように蠢うごめいた。或いは事実そこに腕のような活潑なものが生えていたのかもしれない。そのとき不ふ図と妾めは、いままでに考えていなかったような恐ろしいことを考え出した。それは真一の癩痕のあるところに、もう一つ別の人間の身体が癒ゆ着やくしていたのではなからうか。いわゆるシャム兄弟と呼ばれるところの、二人の人間の一部分が癒着ゆちやくし合つて離れることができないという一種の畸形児のことである。つまり真一の場合は、もともと二人であつたものが、癩痕のところとで切開されて別々の二体となつたものではあるまいか。そうすると別にあつたもう一つの人体はいまどこに居るのだろう。そう考えると、たいへん恐ろしいことだつた。

「だが、それは真一の場合の恐怖であつて、あたしの身の上の恐怖でないからいい！」

と妾は口の中で云つてみた。前にも云つたように、真一と妾とでは、双生児らしく似かよつたところがないと思う。双生児に二種あつて、一卵性双生児と二卵性双生児とがある。

前者はたいへんよく似た瓜二つの双生児が生れるし、後者はそれほど似ていない。似ていないといつても、普通の兄弟姉妹を並べてみたときのように、これははらからだと一見して分る程度にはよく似ているのだった。妾と真一の場合を比べてみると、もちろん一卵性双生児のように瓜二つではないことは言うまでもないが、また二卵性双生児といえるほども似ていない。ややどこかが似ていないでもないが、その程度はとも二卵性双生児などと認められるほどのものではない。だから結局妾と真一とは、それほどの仮定を考えてすら双生児らしいところがなかった。

「その上、もつとハッキリした否定証明がある！」

妾はもう一つ否定証明を考えついた。それは六ヶ敷^{むっ}い医学的な証明でない。つまり仮りに真一にシヤム兄弟的なもう一人の人間があつて、それと妾とが同じ日に同じ母から分娩されたとしたら、これは常識からいっても所謂^{いわゆる}三つ子である。つまり丁寧にいえば三人の三生児と呼ぶことが出来てもこれを三人の双生児とは呼ぶことはできないであろう。

結局妾は疑心暗鬼から、たいへん入り組んだことまで考えたが、これは考えすぎたいへん莫迦をみたようなものであつた。まるで抜け裏のない露地を、ご丁寧^{ごていねい}に抜け路があるかしらと探しまわつて草^{くたびれ}臥^ふもうけをしたようなものであつた。ともかくこれで真一の場

合は、妾に関係のないことがハッキリ証明できたように思うのであるけれど、それでいてなお、なんとなく気がかりなのはどうしたことであろうか。それは妾の身の上を離れて、真一が背中にもつあの癍痕の怪奇性が妾を脅かすのであろうか？

とにかくそんなことは忘れてしまって、妾は父が手帳の中に書きのこした「三人の双生児」という字句が持つ秘密を、別な方面から調べてみなければならぬ。それはもつとつと別の種類のことなのではなからうか。「三人の双生児」のなかの一人は、どうしても妾の身上のことなんだからして、残る二人の人間という不合理に見える合理を解きあげて妾の重い負担を下ろすことにしたいものである。

4

四国の徳島へ出発した女流探偵速水春子女史は、越えて十日目に、たいへん緊張した顔付で妾の邸を訪れた。

「まあ、奥さま。どうか吃驚なさいますな。あたくしはとうとう、貴女さまのほんとおはらからを探しあてて参りましたのでございますよ」

妾は女史の言葉を、俄かに信ずる気持にはなれなかつた。この六ヶ敷い同胞さがしそんなに簡単に解けようとは考えてはいなかつたからである。

「ねえ、奥さま。お驚き遊ばしてはいけませんよ。詳しいことを申し上げるより前に、まずあたくしのお連れ申して来たお妹さま……とでも申しましょうか、それともお姉さまと申上げた方がよろしゅうございましょうか。とにかく同じ年の二月十九日に、御母堂に当ります西村勝子様がお産み遊ばしたお二方のうち、珠枝さま——つまり奥さま——ではない方のもう一方——その方のお名前を静枝さまと申上げますが、その静枝さまを伴い申したのでございます。いま御案内申し上げますから、なによりもお会い下すつて、よくよく御覧遊ばして下さいませ。あの、静枝さま。どうぞ、こちらへ」

饒舌 じょうぜつ 女史は可愛げもない台詞をのべたててから、次の間の方へ声をかけた。

襖の外では微な返事があつて、やがてやさしい衣摺れの音とともに、水々しい背の高い婦人が入つて来た。妾はその婦人を一目みて、どんなに驚いたことであらうか。まことに吾れながらその顔形といい、軀つきといい、髪や衣服の趣味、さては化粧の癖に至るまで

こんなにもよく似た婦人がいるものかと、暫くは呆然と打ち見護っていたほどであった。これが話したいという第三の人物である。

「あら、お姉さまでいらつしやるの。……まあお懐しッ。あたくし静枝ですわ。おお……」
 といつて、その静枝嬢はバタバタと畳の上を飛んでくるなり、妾の胸にとりすがつて、嬉し泣きにさめざめと泣くのであった。それはまるで新派劇の舞台にみるのとソツクリ同じことで、いほど感激の場面が演ぜられたのだった。とり縋られた途端に妾もハツと胸ふさがり、湧きくる涙を塞ぎ止めることができなかつた。

「おん二方さま。お芽出とう御祝詞を申し上げます。あたくしも思わず貰い泣きをいたしました」

と速水女史までもが、新派劇どおりに目を泣き腫らしたのだった。

「一体これはどういう事情だったんです」

と妾はいつまでも鼻をかんでいる速水女史に尋ねた。

「いえもうそれは、たいへん混み入った話になります、今日はちよつとかい摘んで申し上げます」

と饒舌女史が語りだした省略話をもう一つ省略して述べると、次のような事情であると

分つた。

——速水女史が徳島の安宅村というところへのりこんでいきみると、妻の母の勝子はもちろん死んでいて問題の幼童——つまり静枝のことを聞きだすべくもなかった。それから伯父の赤沢常造のところに静枝がいたということであるから、これを質^{ただ}してみたが、自分のところに、その幼童をちよつと預かったことはあるが、間もなく母の勝子が連れだしたまま行方不明になつてしまつて、自分は知らないという。そこで村の故老などにいろいろ聞きあわした末、その幼童が静枝という名を名乗つて、徳島市の演芸会社の社長の養女に貰われていたところをつきとめて、それで無理やりに東京へひっぱつて来たのである。向うでも永く離したがらないので、四五日滞在したら、なるべく早く帰郷するようにと、養父の銀平氏から頼まれて来たというのであつた。

妻は気味のわるいほど実に自分によく似た静枝と、いろいろ故郷の話や、幼いときの話をした。彼女は妻の知つていることは残らず知つていて、すべてはよく符合した。妻を見習つてカンカンに赤い三つのリボンをかけたこともよく覚えていそうであるし、紫の立^た葵^{ちあおい}のこと及びその色ちがいのもので赤や白のものがあることや、日本全国到る処に棲^せ息^{いそく}するサワ蟹のこと、特にその鋏^{はさみ}に大小の差があつて鋏に糸をつけるとすぐそれが挽^もげ

ることなどをスラスラ語った。

「静枝さん、あなたは どうしてあの座敷牢のようなところに入って暮らしていたんですの」と妾はかねて聞きたく思っていたことを聞いてみた。

「それはこうなのでございますわ。あたくしはどうしたものか、極く小さいときから夢遊病を患^{わづら}っていたのでございます。それで夜中に起きてどこかへ行ってしまうようなことがあつてはと、いつも座敷牢の中に入れていたのでございますわ」

「でもいつでも貴女は寝てばかりいて、起きてたところを見たことがないわ。昼間から寝てばかりいたのは何故ですの」

「あれはこうなのでございます。あたくしは或る夜、夢遊して外に出たんです。そして不幸にも崖から川の中へ落ちて足を挫^{くじ}き、腕を折り、ひどい怪我をしたことがあるので、それで立ち上れなくて、いつも寝ていました」

「ああそうだったの。気の毒だったわね。でも、脚を挫いているのなら夢遊でも外は歩けないのじゃない」

「いえそれはこうなんですの。夢遊病者は、たとえ足が悪くても、そのときは歩けるのですから不思議ですわ」

静枝の答は一々明快だった。まだ聞きたいことが沢山あったがあまり尋ねては折角巡せつかくめぐり逢あった同胞はらからのことを変に疑うようで悪いと思ったので、もう一つだけ重大なことを尋ねた。

「あの、『三人の双生児』とお父さまがお書き遺しになった言葉ね、あれはどういう意味でしょうね。あなたと妾とだけでは二人の双生児で、三人ではありませんものネ」

「ええあれはお父さまのユーモアであつたんですわ。つまりお産しとねの褥しとねの上には、お姉さまとあたくしとの二人の嬰兒と、それからお産を済ませたばかりのお母アさまと、都合三人で枕を並べて寝ていたのを御覧になつて三人の双生児とお書きになつたんですわ」

「アライやだ。そんなことだつたの」

妾は、このいままで重大視していた「三人の双生児」の謎が意外も意外、あまりにも明快にスラリと解けたので、滑稽こっけい稽けいでもあり、気ぬけもして、暫くは笑いが停まらなかつた。実にそんなことであつたのか。妾は今夜はこの新しく見つけた同胞のために、内輪ながら極めて盛大なお膳を用意するよう、召使に云いつけたのだつた。そして妾はしばらくの間休息するために、自分の居間に入ったのであつた。

そこへチヨロチヨロと人の足音がして人目を憚はばかるようにして、速水女史が入ってきた。

そこで妾は、手文庫から二百円の小切手をかいて、謝礼のため女史に贈った。女史はたいへん悦んだがすぐには部屋を出てゆかなかつた。「アノ失礼でございませうが、この前伺つたときとはちがいました、お邸の中に変な男の人がいるようでございますが、あれはどうした仁じんでございませう」速水女史は商売柄だけあつて、目のつくのも速かつた。その不審をうたれた男というのは安宅真一のことだつた。彼は妾と始めて話をしたあの日、話半なつかはに急病を起して座敷に倒れてしまった。妾は驚いて早速医者を呼んでみたところ、だいぶん衰弱しているから動かしてはいけないという診断であつた。妾は迷惑なことだつたけれど、そうかといつて真一を戸外につきだしたため、門前で斃たおれてしまわれるようなことがあつては困るから、仕方なしに邸のうちに留めおいて、療養をさせることにした。それからこつち一週間あまり経ち、真一はずつと元気づいた。妾の見立てでは、この「海盤車ひとでむすめ娘」はどつちかというときと空腹で参つていたといつた方が当つていたように思う。この邸でも、男ぎれというものが全くないので、妾も不用心だと思つていたところであるし、かたがた真一を邸内にそのままブラブラさせて置いたのが、逸いちはや早く速水女史の眼に止つたというわけである。妾はそのいきさつを手短に女史に語つて聞かせた。

「まあそうなんでございませうか」

と女史はいつたがそこで一段と眉を擧めて、

「でもあの安宅さんとやらはどうも人相がよくございませぬわ。お気をおつけ遊ばせ。これはあたくしの経験から申すことでございますよ」

女史はそういう置いて、なお心配そうに妾の顔をふりかえりながら帰っていった。

それから三日間というものは、妾の邸のなかには主賓しゅひんの静枝と、飛び入りの安宅真一とを加えてたいへん朗かな生活を送った。真一は別人のように元氣に見えた。しかし彼の青白いねつとりした皮膚や、怪しい光のある眼つきなどは別に消散する様子もなく、どつちかといえば更に一層ピチピチした爬虫類はちゆうるいになつたような気がするほどであつた。

それに引きかえ、実に妾はこの四五日なんとなく肩の凝りこが鬱積うっせきしたようで、唯に氣持がわるくて仕方がなかつた。考えてみるのに、それは静枝が来てからこつちの緩めようのない緊張のせいであろう。それから妾は静枝の対等の地位や静枝を帰すときに頒けわ与えたいと思う金のことでも氣を使いすぎた。

妾はこの肩の凝りをどうにかして早く取りのぞきたいと思つた。どうすればそれは簡単にとることが出来るだろうか

そうだ、いいことがある。

妾はとても素晴らしい遊戯を思いついた。それはなによりも、妾の居間に真一を呼ぶことであつた。

「なんか御用ですか」

彼はイソイソと室に入ってきた。

「真ちゃん。貴方に少し命令したいことがあるのよ。きつと従うでしょう」

「命令ですつて。……ええようござんすよ」

「いいのネ、きつとよ。——」

と駄目を押し置いて、妾は秘めて置いた思惑をうちあげた。それはこの肩の凝りを癒すために今夜妾の室にきて妾だけにあの「海盤車娘」の舞踊を見せて貰いたいということだつた。それを聞いた真一は、ちよつと愕きの色を見せたが、やがて、ニツコリ笑つて肯いた。どうやら彼は妾の胸の中にある全てのプログラムを知らぬ様だつた。妾の全身は、急に滾々と精力の泉が湧きだしてきたように思えて肩の凝りも半分ぐらいははやどこかへ吹き飛んでしまった。

「ねえ奥さん」

と真一はすこし改まつた調子で妾に呼びかけた。

「あの静枝さんという女は、ありや本当は何なんです」

「オヤ早もう目をつけているの、ホホホホ」

妾はそこで彼女が妾の探していた双生児の一人らしいこと、又速水女史の手で探しだされたことなどを詳しく話した。

「へえそうですか」

と彼は軽蔑したような口調でいった。

「そりや奥さん、大出鱈目おおよでたらめですよ」

「出鱈目だつて」

「そうです、みんな嘘つ八ですよ。こうなれば皆申上げてしましますがネ、あの女は暫く僕と同座していたことがあるのです。やつぱり銀平の一団でしたよ。お八重というのが本名で、表向きは蛇使いですよ」

「人違いじゃない？ 速水さんの調べが済んでるのよ」

「いまに尻尾しっぽを出すから見ていてごらんさい。第一年齡が物を云いますよ。あの女は申さるどし年としなんで、今年はやつと二十一です。奥さんは午うまの二十三でしょう。それでいて二人が双生児というのは変じやありませんか。ま、御用心、御用心ですよ」

そういつて真一は立ち去った。妾は彼の話を俄かに信ずることは出来なかつた。明日、速水女史に聞いてみよう。とにかく今日は考える力のない妾だったから。

その夜を妾はどんなにか待ちかねた。今夜真一が妾の室で素晴らしい海盤車娘の踊りを見せてくれることだろうと。

その夜に入ると、幸にも静枝は外出の支度をして妾のところへ現れた。これから約束があるので速水女史のところへ行つてくるといつて、そのまま出かけた。

首尾は極上だった。自室の方はすっかり妾の手で準備が整った。そこで妾は決心をして、真一を呼びにいった。彼は呼ぶとすぐ部屋から現れた。そして子供っぽい顔を照れくさそうに赧く染めて、長い廊下を妾について来た。妾は海盤車娘踊の舞台を、いつも寝室にしている離れの寮に選んだのだった。

そのとき、廊下にバタバタと跫音がして、お手伝いさんのキヨが飛ぶように走つてきた。

「あ、奥さま。お客様がお見えになりました」

「お客様？ 誰なの」

せつかく楽しみのところへ、お客様の御入来は迷惑だった。なるべく追いかえずことに

したいと思つた。

「お若い紳士の方ですが、お名前を伺いましたところ、奥さまに逢えばわかると仰おっしゃ有るのです」

「名前を伺わなければ、あたしが困りますといつて伺つて来なさい」

「ハア、でございますが、その方……」

といつてキヨは目をまる丸くしてみせながら、

「殿方でございますが、とつてもお奥さまによく似ていらつしやいますの。殿方と御婦人との違いがあるだけで、まるで引写しでございますわ」

妾はグクリとした。自分にそんなによく似ている男の人て誰のことだろう。妾はちよつと気懸りになつた。

「じゃあ真さん、先へ入つて待つててちようだい。しかし何を見ても出て来ちや駄目よ」
「ははア、なんですか。じゃお先へ入つていますよ」

妾は部屋の鍵を明けると、真一を中へ押しやつた。そして入口の扉を引くとそのまま廊下へ引返して、キヨの後を追つた。キヨは先に立つて御玄関へ出た。

「アラ、どうしたの」

妾は御玄関でキヨロキヨロしているキヨの肩を叩いた。

「まあ変でございますわねえ。いままでここに立っていらっしやいましたのですけれど、どこへお出でになったのか、姿が見えませんか」

「まあ、いやーね」

妾はすこし腹が立つて、今夜は逢わないといえと云いつけて、すぐさま真一の待っている離れの間へ引返した。

「真さま、お待ち遠さま」

重い扉をあけて、中へ入ったが、どうしたものか真一は返事をしなかった。狸寝入か

しらと一歩、室内に踏みこんだ妾はそこでハッと胸を衝かれたようになって棒立ちになった。

「まあ、——」

当の真一は蒲団の側に長くなって斃れていた。顔色は紫色を呈して四肢はかなり冷えていた。心臓は鼓動の音が聞えず、もうすっかり絶命しているようであった。その枕もとに水を呑んだらしいコップが畳の上にゴロンと転がっていた。

意外な、そして突然の、「海盤車娘」の死だった！

自殺か、他殺？ 他殺ならば一体誰が殺したのであるう？

5

妾は「海盤車娘」ひとてむすめの真一がもう死に切っていると知ると、あまりのことに頭脳がポーツとしてしまった。さしあたり先ず何を考え何から手をつけてよいのやら、まるで考えが纏まとまらない。唯空しく真一の屍体を眺めているばかりだった。

そのうちに少し気が落着いてきた妾は、

「医者だ！ 早く医者と呼ばねばいけない！」

ということに気がついた。そして立ち上った。医者ならばこの男を或いは助けられるかもしれない——と、始めは思ったものの、しかしもしもこの真一がそのまま生き返らなかつたらどうなるのだろうか、それが俄かに気懸りになった。この男は妾の寝室で死んでいくのだ。ああ、そして——今この寝室の中には、他人に見せたくないものがいろいろ用意

せられてあるのだった。そのようなものを若し他人に発見されたらば、どんなことになるであろう。若い未亡人がそのような秘密の慰安を持つているのは無理ならぬことだと善意に解釈してくれる人ばかりならいいが、そんな人は十人に一人あるかなしであろう。悪くすれば、そんなことから妾の行状を誤解して、なにか妾が真一の死に関係があるようなことを云いだすかも知れない。そんなことがあつては大変である。妾は医者を呼ぶのをちよつと見合わせて、それより前に、この部屋を整頓することに決心した。

妾は、そこらに転がっているものや、押入れの中にある怪しげなものなどを、大急ぎですつかりトランクにつめ、別室へ持つてゆく用意をした。でも真一の死体の方は、寢具にそのまま手をつけずに放置し、疑惑を蒙るこうむことのないようにした。結局他人が見たとき、この離座敷は妾の寢室として用意したのではなく、真一の寢室として用意されてあつたように信じさせねばならぬと思つた。

それから妾は部屋を飛び出した。そしてお手伝いさんのキヨの部屋へ行つて、
「キヨ。大変なことになつたから、ちよつと、来ておくれ……」

というときキヨは縫物を抛りだして、

「えッ、大変でございますつて……。ま、何が大変なのでございますか……」

妾は手短に、いま真一が離座敷で死んでいることを述べ、医者を迎えるまでに片づけておきたいものがあるからちよつと手をお貸しと行ってキヨを引張っていった。

「キヨ、いいかい。知れるとうるさいから此室このへやからトランクだのを搬はこんだことは、誰にも云つちやいけないよ。いいかい」

と妾は念入りの注意をすることを忘れなかった。キヨは黙って頭を振って同意を示すだけでした。いつものようにハッキリと返事をしなかった。どうやら真一ののけぞった屍したい体を見てから、すっかり恐怖に囚われてしまったものらしい。

丁度そのときのことであつた。ジジーンと、突然玄関のベルが鳴った。折が折とて妾は胸を衝つれたようにハツとし、持ちあげていた荷物をドスンと廊下へ落してしまつた。

「呀あッ。キヨ、入れちやあいけないよ。入れちやあいけないよ……」
誰だろう？

警官だろうか。妾の胸は早鐘のように躍つた。

ジジーン。ベルは再びけたましく鳴つた——もうお仕舞しまいだと思つた。

「もしもし西村さん。もうお寝み？ あたくし速水なんですけれど」

ああ、速水、——なるほど女探偵の速水春子女史の声に違いなかつた。ああ、丁度いい

ところへ、いい人が来てくれたものである。妾は早速女史を家の中に招じ入れた。

「あら奥さま、すみませんです」

といつになく上ずった調子で

「静枝さま、いらつしやいますか、一緒に出かけるお約束だったんですが、お出にならぬのでお迎えに伺ったんですけれど……」

と女史は云った。ああ、静枝はどうしたのだろう。女史を訪ねてゆくといいしたが、これは行き違いになったものらしい。

「まあ皆さん、どうかなすったの。……お顔の色つちや無いですわ」

突然女史はそういつて妾とキヨの顔を見較べた。もういけない。もう隠して置くことは出来なかつた。咄嗟とつさに妾の決心は定まつた。

「速水さん、ちよつと上つて下さいな。実は大変なことが出来ちゃって……」

と妾は速水女史の手を取るようにして上にあげた。そこで女史に、この突発事件について、差支えない範囲の説明をして、善後策を相談した。

「これは厄介なことになりましたのネ」

と女史は現場を検分しながら沈痛な面持をして云った。

「奥さんは、真一さんの死因が何であるとお思いなんでしょうか」

さあそれは妾の知ることでなかった。頓死かもしれないと思うが、同時に他殺でないと証明する材料もないのだ。それよりも妾には真一がここで死んでいることが迷惑千万であつたのである。——妾は偽りなくその心境を語つた。

「これは奥さまの想像していらつしやるよりも面倒なことになると存じますわ。お世辞のないところ、奥さまの立場は非常に不利でございますわ。お分りでしょうけれど。ことにこの部屋から物を持ちだして証拠湮滅しやうこいんめつを図ろうとなさっていますし（といって廊下のトランクのことを指し）その上に真一さんが横よこたわつてゐる寝具は誰が見ても奥さまの寝具に違いありませんし、それからこの部屋に焚たきこめられた此のいやらしい挑発的な香気と……」

「ああ、もうよして下さい」

と妾は女史の言葉を遮さへぎつた。彼女は何もかも知つてゐるのだ。この上妾は黙つて聴いてゐるにたえなかつた。たとえ妾に恐ろしい殺意がなかつたにしろそれを証明することは面倒なことだし、それに妾が寢室へ曲馬きよくば団だん崩くずれの若い男を引入れたことが世間に曝露しては、妾の生活は滅茶滅茶になることがハッキリ分つていた。それは自分を墓穴に埋める

に等しかった。どうして堪えられよう。

「速水さん。お願いですから、智恵を借して下さい。十分恩に着ますわ」

「さあ——わたくしも奥さまを絞首台にのぼらすことも、また社会的に葬ることも、あまり好まないんですが——」

と女史は意地悪いまでの落着きを見せて、

「でも困りましたねえ——」

「お礼なら十分しますわ」

「いや銭金で片づかないことでございます」

と突っぱねて、

「といつてこのままでは絞首台の縄が近づいてくるばかりで……ああ、そうですわ、仕方がありませんから、妾の親しい医師の金田氏を呼びましょう。彼に頼みましてこの場をあっさりと死亡診断させてしましましょう」

この女史の提案を受けて妾はああ助かったとホッと息をついた。この場がうまく治まりさえすればいい。真一の屍体が火葬炉の中で灰になってくれさえすればそれで万事治まる。妾は女史に謝意を表して早速その金田医師を呼んでくるように頼んだ。女史は別人のよう

に快く引受けると、すぐその手配をしてくれた。

やがて金田医師というのが、駈けつけてくれた。彼は真一を申し訳に診ただけで、

「心臓麻痺——ですな。永らく心臓病で寝ていたということにして置きますから……」

といつて、その旨をすぐに死亡診断書に認めてくれた。

「ああ助かった——」

と妾はそこで始めて胸を撫で下したのであった。

それが済むと、金田医師は手馴れた調子で屍体をアルコールで拭つたり脱脂綿を詰めたりして一通りの処置をした。速水女史もクルクル立ち廻つてその辺を片づけてくれた。

そして枕許にあつた冷水の壘びんなどは、わざわざ持つていつて下水に流し、中を綺麗に洗つてもつて来るなどと、実にまめに立ち働いた。妾はそれ等をただ呆然と見つめているばかりだった。

丁度そこへ、静枝が外から帰つてきた。彼女は玄関を上ると、今まで速水女史の家で、女史が再び帰つてくるかと待ち合わせていたものの、待ち倦あぐんで引返してきたのだと声高に述べたてていたが、真一の突然の死をお手伝いさんから聞くと、驚いて離座敷に駈けつけてきた。その顔は真青だった。

妾の気がすこし落着いたのは、それから十日ほど経ったのちのことだった。

真一の屍体は納棺して密かに火葬場へ送って焼いた。その遺骨はお寺へ預けてしまった。ささやかなる初七日の法要もすんで、やっと妾は以前の気持を取りかえしたのだった。

あれほど気にかかっていた「三人の双生児」の謎も、解けない儘ままに、そう気にならなかつた。それよりも突然に死んだ真一の死因を早く知りたかつた。

真一は病氣のために頓死したのであろうか。いやいやあのようからに元気だった彼が頓死するようからなことはない。それよりも問題は彼の枕頭に転がっていた空からのコツプのことだ。コツプで当り前に嘔のんだものなら、盆の上に戻されていなければならぬと思うのに、コツプが空になって畳の上に転がっていたのは可怪しい。コツプから水を嘔のんで、下に置こうというときに異変が起つてコツプを手から墜おとしたら、ああもなるのではないかと想像さ

れる。ではその異変というのは何であろう？ それは嘸み下した水の中に、なにか毒物が入っていたというような訳なのではあるまいか。

仮りにそれが本当であつたとしたらば、その水瓶の中の毒物は一体誰が投げこんだものであろうか。その恐ろしい犯人は誰なのであろうか。誰が真一を殺さねばならない特殊の事情を持っていたのだろうか。

まさか妾の全然知らない人物が入りこんで殺していったとは考えられない。どうしても犯人はわが家に入出入する人物の中にあるのだと思う。その点では、彼が曲馬団時代に怨恨を残して来た者がわが家に忍びよつて殺したとも思われぬ。ただ、曲馬団というので思ひ出したが、あの静枝はその例外だと思ふ。

静枝！ 静枝！

そうだ静枝が殺したのではなからうか。静枝のことは、速水女史の調べで妾のはらからということが判明したことになるが、真一から聞きいたところによると、元同じ銀平の曲馬団にいたお八重という蛇使いだという話であつた。彼女の秘密が古い馴染の真一の口から洩れそうだと知ると、これは殺しかねないことだろうと思われた。だがそれをハッキリ云うには、それほど確かな証拠が揃っていない。それに真逆まさかあのような優しい静枝が

とは思うが、これは一つ確かめてみる必要があると思った。

「真一を殺したのは、誰だ？」と。

もう妾は静枝を疑う気はしなかった。誰か外ほかに真一殺しの真犯人がいなければならぬ。そういえば、あの日気がついたことだが、確かに閉めさせてあったと思った奥庭つづきの縁側の雨戸に締りがかかっていたいなかった。その奥庭というのは玄関脇の木戸さえ開けばそのまま入って来られるようになっていたのであるから、これはひよつとすると、玄関の方から誰かが密かに縁側へ廻って来て、あの室内の水瓶に毒を混入した。それを知らないで真一が水瓶からコップに水を注いで嘸み、あのように死んでしまったのではないかと考えた。そうでないと、あまりにも不思議な毒物の出現であつたから。

そこに気がついた途端に妾はいままですっかり忘れていたあの夜の重要人物のことを思い出した。それは妾が真一と共に離座敷に入ろうとしたときに、キヨが玄関に来訪を告げに来た未知の紳士のことだった。キヨの言葉を借りると、その紳士と妾とは、男と女との違いこそあれまるで瓜二つのように似ていたので愕いたということである。その紳士に逢おうとて、妾が玄関に出て行つたときには、どうしたものか姿が見えなくなっていた。それから妾はキヨにいろいろ命じたりして、約五分か十分経って、妾が離座敷に行つたとき

には、もう真一が斃たおれていたのであった。それから以来、あの妾によく似ているという紳士には逢わないが、彼こそそのような奇術めいたことが出来る立場にあったのではなからうか。一体あれは誰だったろう。

そこで妾は勝手の方からキヨを呼びよせて、怪紳士のことを尋ねてみたのであった。

「ああ、あの紳士の方のことでございますか」

とキヨは俄かに狼ろうばい狽ばいの色を示しながら、

「まあ奥さま、あたくしどういたしましょう。真一さまのことで大騒ぎとなりましたので、忘れていましたが、実はあの夜あれからもう一度、あの方にお逢いしたのでございます」

そこで訊たずねてみると、妾が寢室へ引取つてからものの五分と経たないうちに、彼の紳士はまた玄関に入つて来たが今夜は逢わないという奥さまのお云い付けつけを伝えるとそのまま帰つた。しかし自分の名前を名乗りもせず、九月の始めになると、また当地を通るから、そのときに気が向いたら寄ろうなどと云つたそうだ。なんとという不可解な紳士だろう。話をきくと、妾に好意を持つているようでいて、よく考えるところと行動の上に於て、この位怪しい人物はないと思われる。黙つて殺人をして引取つていったとすると、これは実に大胆不敵な兇漢であるといわなければならぬ。妾を吃びく驚くりさせるなんて——殺人者として妾の目

の前に立つて吃驚させるぞという悪党らしい遊戯かも知れない。

ただ腑に落ちないのは、妾にこの上なくよく似ているということである。静枝がよく似ていると自分でも思っているがキヨはそれよりもつとよく似ているという。未知の同はらか胞らを探しているのと公表したけれど、こう後から後へと妾によく似た人物が出て来たのでは、気味がわるくて仕方がない。

妾は、その怪紳士が寄るかもしれないと云い残して置いた九月を迎えるのが、急に恐ろしく感ぜられてきた。

7

八月も末になって、暑さが大分和やわらいで来た。

或る日妾は、なんとなく家にいるのが堪えられなくなつてブラリと邸を出た。久し振りの散歩に興に乗つて、思わずも歩を搬びすぎ、いつの間にか隣村の鎮守ちんじゆの杜もりの傍に

出た。そしてそのとき杜蔭に思いがけなくも、曲馬団の小屋が掛っているのを見て、たいへん奇異の感にうたれたが、近づいてみると、古ぼけた蝦茶色の緞帳に金文字で「銀平曲馬団」と銘がうつてあつたのには、夢かどばかりに驚いた。銀平曲馬団といえ、これは亡き真一が一座していたという曲馬団と同じ名であつた。

そこで妾は、小屋の前へ廻つて中を覗いてみたが、生憎一座は休演していることが分つた。横手の草地の上には顔色のよくない若衆がいて、前日までの長雨に大湿りの来た筈を何十枚となく乾し並べていたので、妾はそれに声をかけた。そしてこれが紛れもなく銀平の率いる曲馬団に相違ないことを知つたが、丁度幸いにもいま座長の銀平老人は、古幟で綴つた継ぎはぎだらけの垂れ幕の向うに茶を飲んでいふことであつたから、妾は思いきつてズカズカと中に這入つていつた。なるほどそこには浮世の苦勞を嘗めつくしたというような顔をした小柄の半白の老人が、ただ独りで渋茶を啜つていた。

「ナニ、昔咄を聞きたいというのですかい」

と銀平老人は一向駭きもせず、

「汚穢しいが、まあとにかくこつちへお上りなすつて……」

といつて筈の上へ招じた。

妾の不意の訪問も、この佻^{わび}しい休演中の座長の老人を反^{かえ}つて悦ばせたらしい。思いがけなく熱い茶を御馳走になつて、この老人の行い澄ました心境を覗いたような気がして物を言いだすのに気がたいたいへん樂であつた。

「もこの一座にいたという海盤車娘^{ひとでむすめ}を御存知？」

「ああ、海盤車娘かネ。海盤車娘もたくさんいるが、どの娘かネ」

「娘と名はついているが、本当は安宅真一という男なんですが……あの肩のところに傷跡の残っている……」

「ああ、真公のことかネ。あいつはついこの間まで居たが、とうとうずらかりやがった。

あつしとしては、これんばかりの小さいときから手がけた惜しい玉だったが……貴女さんはなぜ真公のことを訊きなさるのかネ」

そこで妾は、真一が頼つてきて遂に死んだ話をした後、始め真一が幼いときの身の上ばなしをしたが、何かほかに銀平老人が知っていることはないかと訊ねた。

「ああ、真公の生立^{おいた}ちが知りたいというのだネ。あれは今からザツト十五六年も前、四国の徳島で買った子だつたがネ。当時はなんでも八つだといったネ。病身らしい子で、とても育つまいかとは思つたが、肩のところにある瘤^{こぶ}が氣に入つて買つてしまったのさ」

「誰から買ったんですの」

「さあ、そいつは誰だったか覚えていないが、とにかく何処の国にもある人売稼業の男から買った」

「その親は誰なんでしょう」

「さあ、その親おやもと許だが」

と老人は暫く考えていたが、「さあ、後に開演中の客席から大声をあげて飛び出して来た若い女がいたがネ、それがなんでも生みの母親とか云っていたが家出している女らしかった。父親というのは徳島の安宅村に住んでいるとか云ったが、その苗字みょうじは……」

と老人は首を曲げて思い出そうと努めているらしかった。妾は銀平老人の話を聞いているうちに真一の語った身の上が想像していたよりも正確であり、妾にとって実に興味のあつた話であることが分つた。

「苗字は安宅というのじやありませんの」

「イヤ安宅は後になつてあつしがつけてやつた名前だよ。真公の生れた村の名だからいいと思つたのでネ。さて、本当の苗字はちよつと忘れちまつたネ。なんしろ古いことでもありあまり覚える心算もなかつたのでね。ひよつとすると、こうり梱の底に何か書附けとなつて残

つているかもしれない」

妾は老人に十分のお礼をするから、その書附を探してくれするように頼んだ。妾はそれから、蛇使いのお八重という女を知っているかと尋ねた。

「ああお八重かね。あいつも先頃までいたが、可哀想なことをしたよ」

「可哀想なことというと……」

「なに、あの女は真公に惚ほれてやがったが、真公が居なくなると気が変になってしまつて、鳴門なるとの渦の中へ飛びこんでしまつたよ」

「まあ、誰か飛びこむところを見たんですの」

「見たというわけじゃないが、岩頭に草履ぞうりやいつも生命よりも大事にしていた頭飾りのものなどを並べてあつたのを見つけたんだ。それから小屋の中からは、皆に当てた遺書が出て来たが、世を果敢はかなんで死ぬると、美しい文字で連ねてあつた。あの子は仲間の噂じゃ、女学校に上つていたことがあるらしいネ」

「死骸は上つてきたんでしようか」

「さあ、どうかネ。——なにしろあつし達は旅たび鴉がらすのことであり、そうそう同じ土地にいつまでゴロゴロして、出奔しゅっぽんした奴のことを考えている違いとまがないのでネ。それと鳴門

の渦に飛びこめば、まあ死骸の出ることなんざ無いと思つた方がいらいだよ」

この話では、蛇つかいのお八重はインテリ女らしい。すると、やはりあの静枝はこの蛇つかいのお八重なのであろうか。そこで妾は彼女の素性を訊ねたが、あの娘は二年ほど前に突然一座に転げこんで来たので、前身は知らないと老人は答えた。またそのお八重が申年さるとしかどうかも知らなかった。

妾は、果して静枝が蛇使いのお八重であるか、どうかと思つて、それとなく、お八重の容貌などについて尋ねてみたが、聞いていた銀平は大きく肯き、

「そういえば、お前さんをどこで見つたような仁じんだと思つていたが、なるほどお前さんはお八重に似ているところがあるネ。お前さんはその姉さんか身内でもあるのかい」

と云つてシゲシゲと妾の顔を見た。妾は真逆まさかそんなことがネと、軽く打消した。だが、静枝はお八重に違いない気がする。恐らく彼女は一座と縁を切るために、殊ことさら更自殺したらしく見せかけたものであろう。そこには智恵袋の速水女史が采配を振つただろうことが想像されるのであつた。でも彼女の前身が分つていないのでは、どうにも仕方がなかつた。疑うなれば、なにか別の手段によつて、ハッキリした証拠を探すより外はなかつた。ただ静枝が真一に恋をしていたということは初耳だつた。一方真一は静枝を愛していたのだろ

うか。そう思うと、妾の全身はカツと熱くなってきた。

思い起してみると、真一が静枝の前身を告げたときも、どっちかという静枝を軽蔑しているようであつたから、これは真一が慕われる方であつたとしても、慕う方ではなかつたと思われる。妾は僅かに気を持ち直した。

どうも分らないのは妾と兩人の血の關係だつた。静枝はあの三つの赤いカンカンを結つて座敷牢にいた妹らしいと思うのに、一方真一の身の上が妾の幼時と非常に似かよつたところが、ことに家出をした妾たちの母が曲馬団の舞台にいる真一に声をかけたらしいことから考えると、真一も亦、また真実に妾の同胞はらかららしい気がした。一体どっちが本当の同胞なんだろう。

「イヤ真一と静枝との二人とも、妾の同胞なのではあるまいか」

と、不ふ図とそんな疑惑が浮んできた。ああ、そんなことがあっていいであろうか。もし妾たちが同胞だつたとしたら、これはなんという浅ましいことだろう。妾はまだいいとして、静枝と真一とはどうであろう。二人の關係は到底妾の知ることを許さなかつたが、もしや曲馬団からこつちに何かあるのではなからうか。もしあつたとしたら……妾はペツと唾を吐きたくなつた。

ただ慰めは、真一の容貌が、妻や静枝とは大分違っていることであつた。ハッキリ似ていると考えられるのは月の輪がたの眉毛と、腫れぼったい眼瞼とだけで、外はそれほど似ていなかった。たとえ二卵性の双生児としても、それはあまりにも似合わしからぬところであつた。すると真一は境遇の上では妻の同胞に相当していながら、身体の上の印からはどうしても他人染みていた。この不可解な問題は父が書きのこした「呪ワレテアレ、三人ノ双生児！」の謎をときさえすればすべてが氷解することと思う。どうしても妻は、静枝の云うように、彼女と産褥さんじよくにある母とを加えて、父が三人の双生児と洒落しやれらしいことを云つたなどとは考えない。

話によると、体の一部が接がつなつた双生児を、そのところから切り離して、全く独り立ちの二人の人間にした手術の話もあることだから、これはひよつとすると、妻の身体の一部に、そんな恐ろしい切開の痕があるのではないかと、今までに考えてみたこともないような恐ろしい疑惑が浮び上つて、それは嵐の前の旋風に乗った黒雲のように拡がってゆき、遂に妻は居ても立つてもいられない焦躁の念に包まれてしまった。誰がそんな恐ろしい疑惑をもつて、自分の裸身の隅から隅まで検べてみた者があろうか。第一、自分ではどうしても十分に観察の出来ない身体の一部が有るではないかと思うと、妻の心臓は俄かに激し

い動悸どうきに襲われたのであった。

8

そのような悩みに、独り苦悶くもんしているその最中に、妾はまた一つの大きな愕きを迎えなければならなかった。

「ああ、奥様。お客さままでございますが……」

とキヨが顔色を変えて妾の居間に駆けつけた。

「まあどうしたのよ才。お客さまって、誰れ？」

「それが奥さま、いつか夜分にいらっして、名前も云わずにお帰りになった若い紳士の方でございますよ。忘れもしません、あれは真さまがお亡くなりになった晩でございましたわ」

「えッ、あの晩の人が！」

妻はハツと駭おどろいた。妻によく似ているという紳士のことなのだ。あんなことを云い置いていったが、二度と来るものかと思っていた。妻は未だにその紳士が、真一を殺害したのではないかとさえ思っている位だ。その怪しい紳士が、チャンと予告どおりに訪ねてきたというのだ。悪人であろうか。善人であろうか。ちかごろ驚きやすくなった妻は、もうワクワクとして何の考えも纏らなかつた。

「お会いするわ。また帰ってしまったわね」と気味が悪いから、早く客間の方へ上げてよ」
妻に似ているというところを、僅かに安心の足掛りとして、思い切つて会つてみることにした。さあ、どんな男だろうか。一と目見て心臓が凍つてしまいそうでもあり、また早く覗いてみたいようでもあり……。

「妾が主人の珠枝でございます——」

頃合を計つて客間へ這入はいつていった妻は、客という背広の紳士の背中に声をかけた。

「いやア——」

と紳士は、居住いを直しながら、こつちを振り向いた。ああ、その顔——まあ、なんてよく似ている人もあればあるものだろう——と、妻は驚くというよりも感心してしまった。「ああ確かに貴女だ。こんなによく似ているとは思わなかつた。ああ僕は満足です——」

と向うでも容貌の似通っていたことに驚歎して、たて続けに叫びつづけた。

「アノ、失礼でございますが、貴方は誰方どなたさまでいらつしやいますでしょうか」

「ああ、僕ですか。イヤどうも余りに驚いてしまった、名乗ることを忘れて申訳ありません」

と云いながら、紳士はチョッキのポケットから一葉の名刺を抜いて、妾の前に差出した。
「僕はこういう者です。姓の方に何か御記憶がありませんでしょうか」

その名刺の表には、

「南八丈島医学研究所、医学博士赤沢貞雄あかざわさだお」

とあつて、隅の方に「東京府八丈島庁管下」と記してあつた。するとこの紳士は赤沢貞雄と名乗る人である。赤沢という姓？ ああ赤沢といえば……。

「赤沢という徳島の安宅の……」

「そうです。よく覚えていましたネ。僕は赤沢常造の息子なんですが、父だの僕だのを覚えていらつしやいますか」

妾は突然故郷のことを云いだされて、ボーッとなくなってしまった。しかし赤沢の伯父のことは、何で忘れよう。いつもその伯父は、わが家へ繁く来たではないか。貞雄——という

名にも、なるほどそういわれると覚えがあった。伯父のうちに、自分と同じ年の少年がいて遊んだことを思い出した。あれがこの紳士なのであろうか。当時貞雄さんはまだ五六歳の幼童で膝までしかないうぐいすいろ鶯色のセルの着物を着た脆弱そうな少年だった。彼はいつも寒そうに、両手を腋わきの下から着物の中にさし入れて、やや羞含はにかんで歩いていたのを思い出した。

「まあ貞雄さんでしたの。大きくなられて——妾すっかりお見外みそれをいたしましたわ」

貞雄は笑いながら、この前は、妾の家を探すのにたいへん手間どってやつとこの家を探しあてたので、待たせてあった円タクを帰すために一度出て行って間もなく引返してくると、お手伝いさんから面会を断られてしまったので、たいへん面喰めんくらったこと、そのとき北海道の大学へ打合わせにゆく途中だったので、また帰り路に寄ればいいと思ってそう云い残してさようならをしたことなどを語った。それを聞いていた妾は、あの夜の心境を想い出して、穴あらば入りたいたいと思つたことであつた。

「でも、どうして名前を云つて下さらなかつたの。赤沢と仰おつしや有れば、妾必ず出ていったと思うわ」

「イヤそれはネ。貴女に会つて驚かせたかつたのさ」

というわけで、二人は直ぐ幼馴染の昔にかえって、打ち融けた。妾は近頃うち続く不安が、貞雄の不意の来訪によつて大半拭い去られたように感じたのだった。

聞けば貞雄も、妾と同じように二十三歳だということだった。彼はどうやら秀才中の秀才らしく本年学校を出ると、在学中からの研究事項だったものを一層研究するつもりで、断然南八丈島研究所へ赴任したのだった。何の研究であるのかを訊ねたところ、

「ちよつと説明しても分らんア。まア遺伝学みたいなものだが、今までのようなものではない。……イヤもうよみましょう。それよか今日は御馳走でもして貰つて、昔話でもしたいネ」

「ええ、御馳走してよ。そして是非泊つていつて下さいネ。昔話を沢山したいわ。妾もいろいろ伺いたいことがあるのよ」

丁度、妹の静枝は、少し身体を壊している女探偵速水女史に付き添わせて、奥伊豆の温泉にやつてあるので、家の中はキヨと二人切りだったので、貞雄を泊らせるには一向差支えなかつた。

「いや泊ることだけは断る。僕はこれで、ひとの家にお客なんかになつては中々睡れない性分なのでネ。それにチャンとホテルに部屋をとつてあるのだから、心配はいらないよ」

「いいから、ぜひお泊りなさいよ」

「いやいや断る。——」

小さいときもこんな性分だったが、とにかく今の貞雄は学者だけあつてなかなか頑固であつた。妾は近くから珍らしい料理を狩りあつめて貞雄を饗きょう応おうしながら、この機会に妾の悩みを打ちあけて、力になつて貰おうと思つた。

まず妾は貞雄に向い、あの立葵の咲く家の座敷牢の中に寝ていた妾の同胞はらからを探したいという氣になつて新聞広告をしたことから始めて、静枝や真一などが現れるに至つたまでの話を詳しくして、もしや彼が、妾の同胞を知らないかと尋ねた。

「どうも小さい折のことで、僕はよく覚えていないけれど、いつか夜、父が子供を連れて来たことを覚えている。僕はその顔をみたわけではないが、二階に上げた子供がヒイヒイと泣いているのを聞きつけた。それが君のいう座敷牢の中にいた同胞だろうと思うが、泣き声から想像すると、二人のようでもあつたがネ」

「ええなんですつて、連れられていったのは二人だつたんですつて、まア、——」

妾は想像していたところと、まるで、違つてきたので、呆然としてしまった。向うが二人だとすると、妾を入れて三人になるではないか。すると双生児と称よぶのはいかがなもの

であろう。それを貞雄に云ってみると、

「幼いときのことだから、ハッキリしたことが分らないんだ。それに父の常造も先年死んでしまったし、母はもつと前に死んでいた。今、安宅村へ行っても、その夜のことや、君の同胞の秘密について知っている人は一人もあるまい」

「そうでしょうか。——」

妾はガツカリしてしまった。その様子を見ていた貞雄は氣の毒に思ったのであろう。すこしげん厳とした声で、

「でも君の知りたいと思つてゐることは、絶対に分らないというわけではあるまい。つまりそれは学問の力によることだ。もし君が欲するならば、僕はいかなる手段によつてもその答を探し出してあげようと思う。そう氣を落したものでないよ」

「分る方法があれば、どんなことをしてでも探しだしていただきたいわ。妾、これが分らないと死んでも死に切れないと思うのよ」

と妾は切なる願せついを洩らした。それは自ひとりに妾の口をほとぼし迸り出でた言葉だったけれど、このとき云つた、（どんなことをしてでも探しだしていただきたいわ）という言葉が、後になつてまさか大變な妾への重荷になろうとは露ほども氣がつかかなかつた。それがどんなに恐

ろしい重荷となつたかは、この物語の進んでゆくに連れ、だんだんと明白になつてくることであろう。

「でも可笑しいわね。女探偵の速水さんは、徳島へ行つて、静枝という妹を探して来たのよ。安宅へ行つたところ何もかも苦もなく分つたようなことを云つてたけれど……」

という、貞雄は首を振つて、

「どうもその女探偵というのが怪し気だネ。これから一度行つてみると分るだろうが、いまそんなに簡単に分る筈はないと思う。それから『海盤車娘』の真一君の死因だが、これなどは随分不審な点があるネ。たとえば速水女史が水壘の水を早速明けに行つたというのも妙なことじゃないかね。どうだい珠枝さん。その壘とかコップとか、或いは水の零れこぼを拭ぬぐつた雑巾ぞうきんとかいうものは残つていないかしら」

貞雄が抱いている疑惑の点を、妾はすぐに察することが出来た。彼は真一の死を中毒死だと思つているのだ。それは貞雄があ部屋の途中で口にしたと思われるその水壘の中に一切の秘密があると云うらしい。

「そんなものは、その場で始末してしまつたから、有る筈はなくてよ」と云つたものの、よく考えてみると、妾はあの夜離座敷を大急ぎで片づけたことを思い出した。あのととき部

屋の中の品物を仕舞ったトランク類はその儘土蔵の奥深く隠してしまつて、その後は一度も開いたことがないのであつたが、ひよつとするとそのトランクの中に、なにか当時の隠れた事実を証明するようなものが入つていないとも云えないと思う。そう考えた妾は、恥かしいけれど一切のことを貞雄の前にさらけだした。

「ああそんなものがあるのなら、一度出して調べてみたらどうだね」

流石に医者である彼は、変態的な妾の生活など嗤う様子もなく、真面目に聞いて呉れたのだつた。だから妾はすぐさまそのトランクを開いてみる決心をして、貞雄を案内して黴臭い土蔵の中に入つていったのであつた。

9

貞雄の云つたことは正に凶星だつた。

妾たちはトランクを一つ一つ開いてゆくうちに、その一つの中に、あの夜真一が水を飲

むに使った大きいコップを発見した。それは狼^{ろう}狽^{ばい}のあまり妾^{めかけ}が他の品物と一緒に抛^なりこんでしまったものに違いなかった。

貞雄は、そのコップを取り上げて、明りの方に透かしてみたり、ちよつと臭を嗅いでみたりしていたが、やがて妾の方を向き、

「珠枝さん、ハッキリは分らないが、どうやらこれは砒^ひ素^そが入っていたような形跡がある。無^む水^{すい}砒^あ酸^{さん}に或る処理を施すと、まず水のようなものに溶けた形になるが、こいつは猛毒をもっている。普通なら飲もうとしても気がつく筈だが、当人が酒に酔っているかなにかすれば、気がつかないで飲んでしまうだろう。砒素は簡単に検出できるから、あとで検べてみよう。しかしまず間違いないと思うネ」

「まあ、水瓶の中に砒素が入っていたの、まあ恐ろしいこと。一体誰がそんなものを入れたのでしょうか」

「いや、今に僕が分らせてみるよ」

妾はホツと息をついた。貞雄の来てくれたお蔭で、妾の疑問としていたところはドンドン氷解してゆくのであったから、感謝をせすにいられなかった。どうか今夜はぜひ泊ってくれといったけれど、貞雄は中々承知しなかった。

「随分貴方は頑固なのネ。貴方と妾とは従いとこ兄妹じゃありませんか。泊っていったって何も無いじゃないの」

「ああ。——」

と貞雄はちよつと眉をひそめたが、

「貴女は知らないらしいネ。貴女の西村家と、僕の赤沢家とは、赤の他人なんだよ」

「あら、——でも赤沢の伯父さんと呼んでいたことを覚えているわ」

「ははア、そんなこと、意味ないよ。幼いころは、だれを見ても『おじさん』と呼ぶ。僕は知っているけれど、両家は他人同志だった」

「まあ、そうなの——」

すると妾にとつて、赤沢は赤の他人なのだ。今まで馴れ馴れしくしたことが悔いられたけれど、その代り他人であればあるだけ、妾は俄かに胸のワクワクするのを覚えた。

「医者として僕は珠枝さんに云つて置きたいけれどネ」と貞雄は一向頓着なしに話しかけた。「君は同胞はらからを探すことに夢中になっているようだが、たといそれを探し当てても、君はサツパリしないに決っているよ」

「アラなぜ、そうなの」

妾は貞雄が何を云いだすのやら、すこし驚かされた。

「君は、そうした要求の背後に、いかなる本尊ほんぞんさまがあるのかを知らねば駄目だ」

「本尊さまって？」

「端的たんてきに云えば、君は母性慾に燃えているのだ。君の自分の血を分けた子孫を残したがっているのだということに気がつかないかね。同胞探しは、その根本的要求が別の形になつて現れたに過ぎない。本当のところは、君は子供を生みたいのだ」

「そうかも知れないわ」と妾は云つた。「でも妾は男性とそういう原因を作ることを好まないのよ。つまりそういう交渉を極端に億劫おつくうがる性質なの。そういう交渉なしに子供が出来たんだっただけいいけれども、そうもゆかないでしょう。それに妾は一度結婚生活を送つて分つたことだけれど、妾には子供が出来る見込なんかありませんわ」

「そんなこともなからうけれど、結局君のあまりに変態的な生活が、そうした能力を奪つてしまったのかもしれないネ。忍耐づよい夫婦生活が、おそらく自然に君の能力を取り返すだろうと思うが、夫婦生活そのものを極端に忌避きひするようでは困つたものだネ」

といつて貞雄は、軽い吐息といきをついた。妾自身でもこれは困つたものだと思つているのである。変態道に陥つたばかりに、妾は正しい勤めをさえ極端に不潔に思うのだった。

「しかし本当は、君自身子供が欲しいと思うのだネ」

と暫くして貞雄は尋ねた。

「いく度云つても同じことよ。でも不能者に、子供の出来る筈はないわ。その上にどうも妾は生れつき大きな欠陥があるような気がしてしようがないのよ」

貞雄は気の毒そうな顔つきで、妾をしげしげと見ていた。そのとき妾は、いままで忘れていた大事なことを思い出した。それはいつかも考えたことであるが、ひよつとしたら妾の身体には自分で観察することの出来ない箇所に異常な徴候が印せられているのではあるまいか。それを専門的知識をもつて十分に診察してくれる適当な医師としては恐らく目の前に居る此の貞雄の外にないということを感じた。それで妾の胸のうちには、それを確めて貰いたい嵐のような願望が捲き起つたのである。

「ねえ、貞雄さん、妾、医師である貴方にとても重大なお願いがあるのよ。——」

「医師である僕に、どんな願いがあるというのかネ」

妾はそこで思いきつて全身に亘る診断のことを頼んでみた。一つには異状又は異状の痕跡の有る無しのこと、もう一つには妾の懐胎の機能が健全であるか不健全であるかということ、この二つについて早速調べてくれるように頼んだのであった。

「よろしい。そんなことは訳はないことだ。では明日道具を揃えて来て、やってあげよう」といった。妾としては非常に重大なことを、彼があまりに手軽に引受けてくれたことに對して意外の感にうたれたけれど、医師にしてはそんなことは格別なんのこともないのであらうと思つた。

さて其の夜、貞雄はわが家に一泊を承知しないでホテルに引上げて行つた。——そしてその翌朝になると、医療器械のギツシリ詰まつているらしい大きな鞆を下げ、まるで事務員かなにかのように正確にやつて来た。

「さあ、こういうことは、午前にやるのがいいのだから、さあ早く支度をして——」

と云つて妾を促した。妾はキヨを用事にかこつけて外出させてしまおうと思つたので、それを命じていると、奥から貞雄がノコノコ出て来て云つた。

「キヨさんを使いにするのなら、アレが済んでからにしてはどうかネ」

この貞雄の言葉には、妾はすっかり興きようを醒さましてしまった。キヨを外に出してしまえば、どんなに落着いて妾の楽しみを味うことが出来るだろうと予期していたのが、すっかり駄目になつた。「キヨが居ては、妾いや厭いやだわ。——」

と妾は、ちよつと拗すねてみせた。

「それはいけない。こういうことは、たとえ医師でも誤解をうけやすいことだ。どうしても誰かに立ち会って貰うのでなくては、僕はやらないよ」

貞雄の頑迷な潔癖さには、妾はつくづく呆れてしまった。また一面に於ては、それだけ彼の人物が気に入った。もう仕方ないので、キヨを立ち合わせることに同意した。

貞雄は、妾の居間を診察室に決め、その隣りの納戸を準備室に決めた。準備室には、何に使うのだから訳の分らないいろいろな器械や器具を並べたて、見たところたいへん大袈裟おおげさでかつ厳おごそかだった。

こうして午前十時から、いよいよキヨ立ち会いのもとに綿密な診察が始まったが、それは約一時間に亘った。妾はあらゆる場所をあらゆる角度から診察され、その上にまるで手術を受けるのかと思うような器械を当てられたり、いろいろな場所にさまざまの注射をしたり、幾度も血液を採取せられたりした。妾はキヨの立ち会っていることなど直ぐ気にならなくなった。どうやら診察が一通り終つたらしいと思つていると貞雄は静かに妾の傍へよつて来て、

「これで診察は終つたよ。君は母性欲が今日は顕著な曝露症ばくろししょうの形で現れていたと思う」と笑いもせず云つてのけた。「精くわしいことは、あとで報告するけれど、見たところ君の身

体にはさしたる重大な異状を発見しない。子供を育てる機能も充分に発達している。君が考えさえ直すなら、普通の人より以上に健康な体躯の持ち主だということが出来る」

そんなことは云われなくても分っているようなものだった。それよりも、もつと訊き正したいことがあった。

「それよか、妾の身体に、何か変わったところか、癍痕きずのようなものは見付からなくて」

「気の毒だけれど、君を悦ばせるような異状は何一つ発見できなかつたよ。——」

それを聴いて妾はホツと溜息をついた。それならばいい。妾は心配したようなシヤム姉妹的な存在でもないのだった。妾は一時に身が軽くなつたような気がした。それで起きて何かお美味いしいものでも喰べようと思つて、蒲団から身体を起しかけた。ところがそれを見た貞雄は、駭おどろいてそれを留めた。

「あツ動いちやいけない。——」

「アラどうして!」

「もう一時間ばかり、そのまま絶対安静にしているんだよ。いろいろな注射などをしたものだから、その反応が恐い。生命が惜しけりや、僕の云うことを聞いて、もう一時間ほど静おとなかに横臥おうがしているのだ」

そういつて貞雄は、妾の肩にソツと毛布を掛けてくれた。——妾は羊のように温和おとなしくなつた。

貞雄が当地を出発したのは、その翌日のことだつた。いづれ冬の休暇ごろには、用があるのでまた当地へ来るから、そのときは非立寄ると云つた。そして例の「三人の双生児」に関する問題も故郷の方をもつと探してみ、面白い発見があれば必ず知らせるといふことだつた。

妾は彼の再訪を幾度も懇願した上、名残惜しくも貞雄を東京灣の埠頭まで送つたのであつた。

10

五ヶ月という日数は、妾にとってあまり永すぎた。——しかしとうとう、その五ヶ月目がやつて来たのだつた。

五ヶ月！

その間、妾は貞雄をどんなに待ち侘びたことだろう。堪えかねた妾は幾度も、南八丈島の彼の許へ手紙を出したけれど、それは梨の礫同様で、返答は一つもなかった。

その五ヶ月の間を、妾はどんなに驚き、焦せり悶えたかしのれない。前には三人の双生児のことで思い悩んだ妾だったけれど、この度はそれどころではなかった。三人の双生児などは、もうどうでもよかった。ましてや真一の死などは何のことでもなかった。彼を殺した犯人が女探偵の速水女史であつても、また静枝が妾の本当の妹でなくても、それはどうでもよいことだった。事実妾は平気で、かの二人の女を同居させていた。二人は全く家族のように振舞っていたのである。ときには、誰がこの家の主人だか分らぬようなことさえあつた。その五ヶ月を、妾は一体何事について驚き焦り悶えていたのだろうか。

妊娠！

妾は目下妊娠五ヶ月なのであつた。

そういうと、きつと誰方でもこの余り意外な出来ごとのために、目を丸くなさることだろうと思うが、妾の懐妊は最早疑う余地のない厳然たる事実なのである。

さらに驚くことは、この懐妊した胎児について、誰がその父親であるのか、妾には全く

見当がつかないことである。妾は全く身に覚えがないのに、このように妊娠してしまったのである。乳首は黝くろずみ、下腹部は歴然と膨らみ、この節せつではもう胎動をさえ感ずるようになった。婦人科医の診断もうけたが紛れもなく妊娠しているのだった。——相手もないに身ごもるなどという不思議なことが、今の世にあつてよいものであらうか。

妾は早く貞雄に会つて、このことについて教えをうけたいと思う。彼のような卓越した学者ならねばこの神秘の謎は解けないであらう。日を繰つてみると、妾は彼が身体の健全を保証していつてくれたその直後に受胎したことになるのである。といつて彼は決してその胎児の父ではないと思う。なぜなら貞雄は非常に潔癖で妾の家に一泊することすら断つたほどであり、もちろん妾は一度たりとも彼を相手にするようなことはなかつた。いや貞雄ばかりのことでない。その外の男という男についても同じことが云える。妾は絶対に誓う。妾は男を相手にして、懐妊の原因をつくるような行いをしたことは一度もないのだ。しかし妊娠していることは、どこまでも厳然たる事実なのであつた！

妾も驚いているけれど、ひよつとするとともに驚いている人がありはしないかと思う。中でも女探偵の速水女史と、妾の妹の静枝とがはからずもそれを発見したときの驚きといつたらなかつた。

「まあ驚いてしまいますわねえ。奥さまはどうして妊娠なすったんですの。相手は何処の誰でございますの？」

女史は横目で妾のお臍へそのあたりを睨みながら、あたり憚らず驚きの声を放った。

「まあお姉さま、驚かせるわね。でもあたくしは存知ぞんじていますわ。あたくし達が伊豆へ行っている間にお作り遊あそばしたんでしよう」

静枝も驚きの目を睜みはつたが、これは嬉しそうな驚きに見えた。しかし速水女史の方はそれ以来ニコリとも笑わなくなってしまった。こうなつては、妾の立場というものがいよいよなくなつてしまったのだつた。

それだけではなかつた。それからというものは女史と静枝とは、暇さえあれば額を合わせて何事かブツブツと口論しあつた。それを耳にするにつけ、妾はたまらなく不愉快になつていった。

ところで妾の待ちに待つたる貞雄が、約束した五ヶ月目にはとうとう姿を見せず、遂に七ヶ月目となつてまだ肌寒く雪さえ戸外にチラチラしている三月になつてやつと妾の家の玄関に姿を現した。

「貞雄さんが来たつて？」

キヨからその知らせを聞いて、すぐ飛びだしかけたものの、もう七ヶ月目の腹を抱えた妻のことである。妊娠のことは手紙で知らせはしてあったものの、この醜態を自ら見せにゆくほどの勇気がなかった。

「ほう、随分見事な腹になったネ」

と貞雄は真面目な顔をして入ってきた。彼がそんなに取すましていなかったら、妻はいきなり怒鳴りつけたかもしれない。

「貞雄さん、一体これはどうして下さるの」

と、妻は思う仔細があつて、つかかかつて行つた。

「いや、どうにでもするよ」

と貞雄はさりげなく答えながら、

「今度は君のためにいろいろと大きな土産を持って来たよ。どこか静かなところへ行つて、ゆつくり話したいネ」

といつて、例の静かな瞳をジツと妻の顔に据えた。妻にはそれ以上つかかかつてゆく勇氣を持ち合わさなかつた。

彼はその日一日をわが家でブラブラしていたが、妻が何を云つても碌ろくな返事をしなかつ

た。その代り速水女史に呼ばれると、イソイソと彼女の後についていて、長い間部屋から出て来なかつたりした。彼等はわざと注意をしているらしく二人の声は全く洩れてこなかつた。

その翌日になると、貞雄は妾を伴つて外へ出た。そして連れこんだのは、市内の某病院だった。彼はそこで顔の利く方と見えてズンズン通つていった。そして妾を「レントゲン室」と表札の懸つている部屋へ入れて、三十分間あまり、ジイジイとレントゲン線を発生させて、妾の腹部を覗いたり、写真を撮つたりした。その間、彼はまるで人が違つたように無口だった。

それが済むと、彼は始めて微笑を浮べながら、妾をねぎ勞らつた。それから再び外へ出て不し忍のぼすのいけ池を真下に見下ろす、さる静かな料亭の座敷へ連れこんだのだった。いよいよ貞雄は妾に重大なことを云おうとするに違ひなかつた。妾は並べられたお料理なども全く目に入らないほどの緊張を覚えたのだった。

「珠枝さん——」

と貞雄は静かに呼びかけた。

「貴女は僕に聞きたい色々のことからを持つているだろうネ。イヤ、暫く黙っていてくれ

たまえ。僕が適当な順序を考えて一応話をするからどうか気を鎮めてよく聞いてくれ給え。——まず真一君を殺した犯人のことだが、それは今日、本人の自白によってハッキリ分つたよ」

「まあ、誰なのでしょう」

と妾は思わず乗りだした。

「そう興奮しちやいけない。——その犯人というのは、やはり速水女史だった。静枝さんは無関係だ」

「ああ、速水さんが真ちゃんを殺したの」

「そうなのだ。僕は或る交換条件を提出し、その代償として聞いたんだ。で、その条件というのは、君が腹に持っている胎児を流産させることなのだ。イヤ驚いてはいけない。一体、速水女史は事実君の妹でもなんでもない蛇使いのお八重という女を籠絡ろうらくして、静枝と名乗らせ、この家へ乗り込ませた。それはお八重がたまたま君によく似ていたので使つたまでで、そうすることによつて君の財産をお八重に継たぐらがせ、そこで速水女史は軍師の恩をふきかけて結局莫大な財産を自由にしようという企たくらみをしたのだ。その計画はたいへん巧く行つた。これなら大丈夫と思つていたところ、意外にも意外、君が妊娠してしまつた

ので、速水は大狼狽だいろうばいを始めたのだ。なぜなら、君に子供が生れりや、一切の財産はその子供が継ぐに決っているからネ。そこでこれはたまらないと悄気しよげしていると、僕が悪党らしく流産手術を持ち出したものだからすつかり安心して、真一君を亜砒酸あひさんで殺したことを自白に及んだというわけさ。もちろん想像していたとおり、この家に潜伏していた女史は、酔っている真一が水を呑むのを見越して、水瓶の中にその毒薬を入れて置いたのだ。女史が事件後、真先まつさきにその水を明けに行つたのも肯うなずかれるネ」

妾はただ呆れて聞いているより外ほかなかつた。

「ところで真一君だが、あれは紛れもなく君の同胞はらからだ。『三人の双生児』の説明は、後で詳しく云うけれど、とにかく亡くなつた君たちの母親は、真一と君とを生んだのに違いない。これは徳島に隠棲いんせいしているその時の産婆の平井お梅というのを探しだして聞き出したのだ。書いて貰つてきたものもあるから、後でゆっくり見るがいい。ただし、君と真一とは、あのよく似ていて瓜二つという一卵性双生児ではなくて、すこし顔の違つてくる二卵性双生児であつたことは、君にもよく分るだろう。しかしまだその上に、恐ろしい因縁話があるのだ」

と云つて貞雄は茶碗からゴクリと番茶を飲んだ。

「君と真一君が、双生児にしては余り似ていないことを不思議に思うだろうが、そこに重大な謎が横たわっているのだ。このところをよく分つて貰いたいだが、実は君たちは双生児であつて、その卵細胞は同じ母親のものながら、その精虫を供給した父親が違つていたのだ。いいかね、分るだろうか。——つまり、ハッキリ云うと、真一君を生じた精虫は君の亡くなつた父親のものであり、それから君を生じた精虫は、実に僕の父親である赤沢常造のものだつたんだ。さ、そういうと不思議がるかも知れないが、君はこんなことを知つてゐるだろう。膣内の精虫の多くはその日のうちに死んでしまうけれど、中には二週間たつても生存しているものもあるということ。だからここに二卵性の双生児が出来たとしても、それが同一日に発射された精虫によるとは限らないのだ。そういえばもう分つただろうが、僕の父の赤沢常造の精虫が発射されたその数日か十数日か後に、真一君の父親が船から下りて来てまた精虫を発射する。このとき偶然にも二人の精虫が、君の母親の二つの卵に取りついてこの二卵性双生児が出来上つたのだ。それで合点がゆくことと思うが、君と僕とが、戸籍の上では赤の他人でありながら、実は二人は父親を同じくする異母兄妹なのだ。だから君と僕とが、兄妹のように似ていることが肯かれるだろう」

妾はあまりの奇怪なる話に、気が遠くなるほど駭いた。話は分るけれど、そんな不思議

なことが吾が身の上にあるとは、なんとという呪わしいことだろう。それにどんなにか慕したわしく思っていた貞雄が、血を別けた兄妹であったとは、なんとという悲しいことだろう。

「君の愕くのは尤もつともだが、まだまだ愕くべきことが控えているのだよ。——とところでいよいよ『三人の双生児』の謎だが、これは解いてみると案外くだらないものさ。こんなことを日記にかきつけたのは真一の父親だった。彼は船乗りだった。船乗りの語彙でもって『三人の双生児』といったことをまず念頭に置かなくちゃいけない。実は君の方は普通の健全な人間だったけれど、真一君の方はそうでなかった。彼は畸形児だったのだ。手も足も胴体も一人前だったが、気の毒なことに首が二つあった。つまり両頭の人間だったのだ。そういえば思い当るだろうが、真一君の肩にあるあのいやらしい癍痕きずのところには、昔も一つの首がついていたのだ。その首にはチャンと名前がついていた。西村真二というのだ。いくら子供が可愛くても、この両頭の畸形児を人に見せるわけにはゆかない。そこであの座敷牢があるのだ。君は女の児だと思っていたろうが、子供るときには男女の区別はハッキリしない。殊に終日寝かされて何の変った楽しみもない真一真二の幼童が、たまたま君の髪に結んだ赤いカンカンを見て、あたい達にもつけてよ才とせがんでも無理のないことではないか。そして二つの首を見せて駭かすことのないように、母親がいろいろ気を

配つたことも無理ならぬことだ。その後、真二は顔に悪性の腫物はれものが出来たので遂に大学で未曾有みぞうの難手術をやり、とうとう切つてしまった。そうしないと真一までが死んでしまふおそれがあったからだ。真一君が流浪の旅にのぼるようになったことなどは説明するまでもあるまい。僕は君を大学へ連れて行って、アルコール漬になっている真二君の首を見せたいと思うよ。——まあそんなわけだから、君たちが生れたときに、お父さんが『三人の双生児』と呼んだのも根拠のあることだ。身体から見れば双生児であり、首の方は三つあつたんだからネ」

ああ、なんとという恐ろしい話だろう。これほど怪奇を極めた話が、この世に二つとあろうか。妾は舌を噛み切つて死にたいような衝動に駆られた。といつて、舌を噛み切つて死ねば、妾の腹にある胎児は、暗やみから暗へ葬られるのだと気がつく、妾はハツと正気に返つた。そしてそこで妾は吾が子のまだ知らぬ父親のことが急に知りたくなって、自らを制することができなくなつた！

「妾の腹の子の父親のことを教えて下さいな。どうぞ後生ごしょうですから……」
と叫んだ。

「ではそれを教えてあげようが、これから大学まで歩いてゆく道々話すことにしよう」

最早^{もはや}妾^{めかけ}たちは折角の料理に箸^{はし}をつける気もなくなつて、そのまま外に出た。池^{いけ}の端^{はた}を本^{ほん}郷^{んごう}に抜ける静かなゆるい坂道を貞雄に助けられながらゆっくりゆっくり歩^はを搬^{はこ}んでゆく――が、妾の胸の中は感情が戦場のように激しく渦を巻いていた。

「君の胎^{はら}の子の父親はねエ」

と貞雄は耳許で囁いた。

「――驚いてはいけない、この僕なんだよ」

「まあ、貴方ですつて、――」

妾はそれを聞くとカツとして、思わず貞雄をドンと突き飛ばした。

「ああ悪魔！　恐ろしい悪魔！」

と妾は喚^{わめ}きつづけた。

「貴方と妾とは血肉を分けた兄妹じゃありませんか。それだのにこんな罪な子供^{はら}を姪^{はら}ませるなんて……ペツペツ」

と、妾は烈しく地面に唾を吐いた。

「ま、そう怒つてはいけない。君は誤解しているようだ」

と貞雄は恐れ気もなく、傍に寄り添つて来ながら、

「僕は誓う。また君自身も知っているだろうが、僕は絶対に君と性的交渉を持ったことはないのだ。ね、そうだろう。——だから怒ることはないじゃないか」

そういわれると、妾にもその忌わしいこといまの覚えはなかったが、それにしても……。

「じゃあ、それが本当なら、なぜ妾は貴方の胤たねを宿したのです。誰が訛だまされるもんですか。嘘つき！」

「君と関係を持たなくても妊娠させることは出来る。——君は覚えているだろうが、この前僕が医師として君の身体を検べたときに、簡単な器械で君に人工妊娠をしといたのだ。造作のないことだ」

「じゃあ、忌わしい関係はなかったんですね」

と妾は稍安堵ややあんどはしたものの重ねて詰問をした。

「でもなんの目的で、妾を身籠らせたんです！」

「それは君、君の頼みを果たしただけのことだよ。君は『三人の双生児』のことを知りたがつて、どんな手段でもいい、と云ったではないか、実を云えば、先刻話をした結論の中には欠陥があったのだ。それは私の父と君の母親とが果して関係したかどうかということだ。それを僕は遺伝学で証明しようと思った。調べてみると、君の母親の血統には両頭児の生

れる傾向があるのだ。真一真二が生れたのは、君の母親が割合に血縁の近い従兄である西村氏と関係したので、その血属結婚の弱点が真一真二の両頭児を生んだのだ。しかし僕の父とは他人同志だから、とにかく健全な君が生れた。そこで君が私の父の子であることを証明するには僕の考えた一つの方法があると思うのだ。それはそこでもう一度君が君の血族から受精してみると、きつと血族結婚の弱点で両頭双生児が生れるだろうという——これは僕が論文にしようと思つているトピックスだ。そこで僕は学問のためと君の願いのため、僕の精虫を君の卵子の上に植えつけてみたのだ。その結果……」

「おお、その結果というと……」

妾はハツと思つた。

「その結果は、果然僕かげんの考えていたとおりだ。僕は偉大なる遺伝の法則を発見したので。すなわち君がいま胎内に宿している胎児は、果然真一真二のような両頭児なのだよ。レントゲン線あきらが明かにそれを示して呉れたところだ」

「ああ、双頭児ですつて？」

妾は気が変になりそうだ。

「僕の研究は一段落ついた。で、この上は君の希望を聞いてみたいと思う。その双頭児を

これから大学の病院で流産させてしまおうと思うのだがネ」

「ええどうぞ、そうして下さい。是非そうして下さい。妾は親となって育てるのはいやです」

と喚き散らした。

そこで妾たちは、大学の医学部教室へ入った。

「ほら、これが真二の首だよ」

そういつて貞雄は硝子瓶の中にアルコール漬けになった塊を指した。妾はそれを覗いた。
「ああ、あの子だ」

それは確かに、妾の記憶にある懐しい幼馴染の顔だった。実になんとという奇しき対面であろう。色こそ褪せて居るけれど、彼の長く伸びた頭髪は、可愛いカンカンに結って、その先に色を失った三つのリボンが静かにアルコールの中に浸っていた。ああ、なんという可憐な顔だろう。妾はそれをじっと見つめているうちに妾の考えが急に変わってくるのに気がついた。そうだ、今腹に宿っている両頭の子供を下すのは思い止まりたい。例えそれが畸形児であろうとも、妾が母たることに違いはないのだ。血肉を分けた可愛い自分の子に違いないのだ。流産して殺すなんてそんな惨たらしいことがどうして出来ようか。

妾は貞雄が向うの標本を眺めている隙に、独りで教室をドンドン出ていった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1934（昭和9）年9、10月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「現代推理小説大系8 短編名作集」（講談社、1973（昭和48）年）を参考に、誤植が疑われる以下の箇所を直しました。（数字は底本のページと行数）

○316-上-1 キユウと唇と曲げて↓キユウと唇を曲げて

○320-下-22 遠く距《へただ》って↓遠く距《へただ》って

○333-上-15 【底本では、右の1行が脱落】↓「出鱈目だって」

○358-上-22 妾をそれを覗いた↓妾はそれを覗いた

※「妊娠」と「姪娘」の混在は、底本通りとしました。

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2004年5月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三人の双生児

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>